
白銀の夜明け（プレリュード） [乾クエ1]

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の夜明け（プレリユード） 「乾クエー」

【Nコード】

N0700N

【作者名】

群青 坊哉

【あらすじ】

全ての物が魔石によって動く世界、フロース。

魔石とは、太古の戦いで命を落とした天使や魔族の魔力が結晶化したもので、いまや人界での生活にはなくてはならないものだ。

中でも、使う事は愚か持つことすら禁じられる程強力な魔力を秘めた魔石は禁術封石と呼ばれる。

現在。フロースでは禁術封石を巡って、ストーンハンターやらコレクターやら、警察官やら天使やら、こっそりこそそ魔族なんかも乱入しては右往左往している。

さて、そんな世界を舞台に暴れる主役達とは。

そんなこんなでコレクター達がよく手に入れた禁術封石を片っ端から強奪してゆく世にも無慈悲な野良ストーンハンター、リチュム・フォルツェンドと、

彼の周りに集まった、ちよつと（？）オバカでちよつと（？）変わった世にも不思議な連中たち。

今日も今日とて大騒ぎしながら平穩（？）な毎日を過ごしていたのだが、とある目覚めをきっかけに事態は一変、

彼らは転がるように思わぬ状況へと墮ちてゆくのであった

これは、それぞれに宿命を背負った奴等が、それでも望むものを手にする為、とある運命に立ち向かう、愛と勇気と涙と希望の物語である

のわあんちゃって。

1 (前書き)

v | 1
i | 0
6 | 5
5 | 2
4 | 2
5 | 2
5 | 2
^

「創世の神は、大きな石だと言われている」

とある午後の、猛烈に気だるい時間帯。

立派な白髪頭と、鼻にかけた老眼鏡。他に特筆すべき事といえば、話が長い事で生徒に嫌われてしまっているところだろうか。四十名が在籍している教室内に、年老いた教師　通称ナカGの抑揚の無い声が響き渡っていた。

それ以外にも、しわがれ声を子守唄代わりに寝入ってしまった生徒達の寝息も混ざっているのだが、当のナカGは気づいているやらないやら。教壇で黙々と教科書を読み上げている。

「この世、万物の力は石から成る。故に石の存在なくして文明の発展はなかったとされている」

世界フロースに存在する島国の内、最大の面積を持つというここはプリムス国。

中央都市グノースに建設されたアイオン教会は、設立十八年と歴史はまだ浅いながらも、世界でも一二を争う程広大な敷地を持つ大教会だ。

他国から見ると島の丁度中央に位置している教会の真白の尖塔は、^{プリムス}国のシンボルと化している。

ここは、アイオン教会の敷地内に建つ学習施設アイオン学園初等部の一教室。

窓際の列の前から四番目という、誰もが羨む絶好の席に腰掛^{ホジション}けている少女は、つい先日十一歳になったばかりだ。

しかし、その容姿は実年齢よりもずっと幼く映る。特に同じ教室

にいる子供と比べるとずば抜けて低い身長は彼女最大のコンプレックスだった。

少女は日に二回、自身にカルシウムの摂取を課しており、朝晩ビールジョッキに並々と注がれた牛乳を腰に手を当てて豪快に飲み干している。

(……………あーあ……………)

幼さ以外にも、深い碧色の大きな瞳や鮮やかな黄緑の髪色は殊更周囲の目を惹いた。世界中に名の知れる程大きな学園内において少女を知らない者はいない。そんな一施設のちよつとした有名人は、今朝から頼杖をついたままの姿勢で盛大に溜息を吐き続けていた。

(ただでさえ面倒臭いつてのに……………)

正確には、少女の溜息はホームルームの後から。……………もつと詳しくいうとホームルームの際、担任が告げた連絡事項を耳にした直後からである。

(やっぱりここは……………いや。校則ゆるゆるでも規律に厳しいアイオンの事だもの。最悪、家庭訪問とか言い出しかねない、か……………)

溜息をつく度に、高い位置で二つに分けて編まれた長い髪が顔にかかる。

伏し目がちの表情は冴えない。

(あぁ……………気が重い……………)

見るからに憂鬱そうな少女の頭の中には、今朝配付された三者面談の日程表がただ一枚、君臨していた。

「世界には大きく分けて三つの種族が存在している。先ず、人間フロース。それから人型よりも色素が薄く、背に羽が生えている種族を天使。人型をしていない種族を魔族と呼ぶ。彼らは人にはない魔力というものを持っている」

少女は黒板の右側に設置された深緑のボードに目を向ける。色取り取りの紙が貼られたボードの中央に、一際大きな警告記事が掲示されていた。

数年前からプリムスを騒がせている大泥棒を取り上げたものだ。

「彼らは絶命するとその肉体も消滅してしまうが、彼等の体内に備わっていた魔力は、消滅を避ける為か、凝縮、固体化して消えゆく肉体を離脱する。この魔力の結晶を総称して”石”と呼んでいる。即ち石とは、生前の彼らの魔力 否。存在そのものである」

何度目かの溜息をつこうとして、少女が大きく息を吸い込んだその時。

「石にはそれぞれ属性があり、人によって使いこなせる石と使いこなせない石が存在する。しかし加工、製品化された石はその限りではない。石を加工して出来た物を総称して石化製品と言う。石化製品には誰にでも扱う事のできる様にあらゆる細工が施されており、一般家庭の機器を誰もが難なく使う事ができるのはそういった理由である」

ポケットの中に忍ばせてあったナニカが、微かな音をたててその身を震わせた。

(……キタ)

「だが、『禁術封石』と定められる石は、如何なる細工を施そうと決して人間には取り扱ふ事は出来ないとされている。故に人界で発見された禁術封石は警察機関を通じて、速やかに天界へ届けられ」
「先生」

ナカGの声を遮って、おずおずと席を立つ少女。

室内の空気の微妙な変化に、安らかに寝入っていた数名の生徒が身を起こす。クラス中が少女に注目した。

「なんだね。リタル・ヤード君」

「すみません。体調が悪くて……」

「ああ。そうか」

少女が言い終えるまでに事を察したナカGは、教室を見回す。

「誰か。彼女を保健室へ……」

「いえ。一人で大丈夫です」

少女の声に、ナカGはもう一度少女を見遣って「そうか」と一言。行儀良くペコリと頭を下げた少女が後方の扉から教室を出る前に、授業に戻ってしまった。

(リタルさん、大丈夫かな……)

(病弱だからな。彼女)

(しかししゃっぱり一言返事だったな……。こないださ。俺が早退したいつつたらナカ爺さんの奴、問答無用で却下してくれたんだぜ？)

(馬あー鹿。おまえと彼女とじゃ出来が違うだろ)

(授業なんてほとんど出てもないのに頭いいからな、彼女。さす

がは外来って奴だ。ナカGも一目置いてるんだろ)

(外来? なにそれ)

(おまえ知らないの? アイオンって、指定区外からの入学はすげえ厳しいらしいぜ? 指定区内なら勉強しなくても入れるけど、この学校設備整ってるから外から受ける奴が五万といるらしい)

(それは聞いた事あるけど……指定区って、グノーシス近辺だろ? って事は彼女。この辺の生まれじゃ)

(ない。リタルって転入生なんだよ。二年前だったかな……俺、そんな時と同じクラスだったから覚えてる)

(頭いいわけだ……)

(二年前って、フォルツェンド一味が騒ぎ出した頃と同じだな。リタルさん見るからに金持ちそうなのに。越して来たんだとしたら、ツイてないね……狙われたりとかしたのかな)

(フォルツェンド一味って金持ちからしか盗らないの?)

(じゃなくて、禁術封石しか狙わないって噂。コレクターの家に入るらしいぞ)

(一度見てみたい気もする)

(わかる。失神するほど美形って聞けばなあ……。で? リタルん家って金持ちなの?)

(あのしゃべり方とか、立ち居振る舞いは、絶対お嬢だよ)

大して親しくも無い 実は少女の内では見下されていたりするクラスメート達の会話が好き勝手に展開していたその頃。廊下の窓に手をかけ晴天の下へ飛び降りた「病弱な少女」は、全力疾走で己のホームへ向かっていた。

2

「はあ……」

もう幾度目か。いい加減数えるのも馬鹿馬鹿しくなってきた数の溜息を、少女は飽きもせず盛大にもらす。

「……なんだよ」

廊下に一列に並べられたパイプ椅子。その一つに足を組んで座っている男の青瞳が少女を映した。

銀の長髪を後ろで一つにまとめ、イツチヨマエにスーツなんて着込んできたこの男は、少女の隣でやけに偉そうに踏ん反りがえっている。

しかし少女の大きな瞳は隣の男を通り越して、廊下の端で騒いでいる女生徒たちの様を眺めていた。

(アレって、リタルさんのお父さん!?)

(まさか! お兄さんよ、絶対!)

(えー確かに美形だけど、あんまり似てないじゃない!)

(リタルさんを通じて お近づきになれないかしら……)

「……ううん。やっぱ、あんたを連れてくるんじゃないかな……とか」

視線を地に落とすと、少女は聊か疲れた表情でボヤいた。

男の端正な顔立ちとスタイルの良さ、長く伸びた艶やかな銀髪は相当人目を惹く。

男を連れて教会に足を踏み入れてからというもの、少女は見世物パンダよろしく、行く先々で女生徒達に指され、黄色い声を浴びせられた。……正確に言えば、歓声を上げられまくっていたのは、隣の無駄に整った面をした銀髪の男の方なのだが……とにかく。居心地の悪い事、この上ない。

「『三者面談』だろ。俺様が行かねえと困んじゃねえか」

周りの騒ぎに気づいていないのか。涼しい顔で腕組みしていた男が答え……、

……前言撤回。コイツ気づいてた。浮かれた面して女の子達に手なんか振ってる。

「素直に天涯孤独の身って言っとけばよかった」

さらに続く少女の溜息に、切れ長の青い双眼が細くなる。

「おまえあ……俺様だって無い時間裂いて来てンだぞ」

「どうせ家にいたって。踏ん返り返って寝てるだけでしょう」

「夜忙しい身だからだ」

間髪入れずに言い放った男に、それは自分もだと反論すべく口を開いたその時、ガラッと音をたてて教室から一組の母子が出てきた。教室を振り返っては中に居るのである”担任”に会釈。そして視線に気づけば、こちらに向かってまた会釈。さらには廊下を進む度に出会う教師や生徒にその都度会釈。

……忙しいものだ。

「次。リタル・ヤードさん」

頭を下げた回数分遠くなっていく二つの背にジト目を向けていた少女は、名を呼ばれて視点を隣の男に戻す。

「……んじゃま。行くか」

少女の視線を受け、パイプ椅子を鳴らすとその場に立ち上がった

男。少女の返事を待たずに一人でスタスタ教室に入っ
ていった。

「ったくもおお」

呟きと同時に溜息を吐いて、少女も男の後を追った。

3

扉を閉めて教室を振り返る。既に男は、生徒の机を挟んで”担任
”の向かいの席に腰を下ろしていた。

穏やかな空。柔らかな午後の日差しが降り注ぐ無人の教室で、
”担任”として自分を迎えた女教師はぺこりと頭を下げた。

「こちらに掛けてください」

女教師は十七歳とまだ年若く、少女と呼んでもよい程の容姿をし
ていた。透き通るような白肌にルビーのような赤い瞳。肩までの蒼
髪を後ろで一つに結んでいる。

少女が着席するのを見届けると、女教師はコロコロと鈴の鳴るよ
うな声を上げた。

「ええつと、……リタルさん」

綺麗な響きとは裏腹に、その表情はこれでもかと言う程に強張っ
ている。

「……リタル、でいいわよ。センセ」

机の上に広げたマニュアルと資料を端から端まで睨んでいた女教

師に、少女は呆れ顔で突っ込んでやる。

「は、はい。えと、リタル……ですが」

「どうでもいいが、さっさと終わらせてくれよな。どうせリタル《こいつ》の事だし、後もつかえてるみてえだし、ちゃっちゃんと行こうぜちゃっちゃんと」

「あんたね」

横やりを入れる男を少女が言及するよりも先に、意を決して顔を上げた女教師が少女と男、それぞれに視線を向けた。

「では、リタルさん……じゃなくて。リタル、は、おうちではどうですか？」

「普通よ」

「てか、おまえ見てンじゃねえか」

男の言葉に女教師は一瞬、怯んだ様子を見せたが、

「……では、保護者の方にお尋ねしますが」

……お。めげない。エライ。

少女は心の中で女教師の成長を称えてやる。

「将来はお子さんをどういった就職先に就かせたいと、お考えでしょうか。他にも、なんでもいいです。リタルさんの進路について、何か思案されてる事はありますか？」

「あー……」

耳どおりの良いバリトン。腕を組み眉間に皺を寄せて、男は低く唸った。

隣の少女のジト目と、女教師の真摯な視線と。二つの視点が集中する中、男はふっと顔を上げると、

「……泥棒のアシスト？」

そう一言だけ答えた。

腹の底から溜息を吐き出す少女に、思わず椅子からずり落ちてしまいそうになる女教師。

なんとか堪え、女教師は改めて男に向き直る。

「事前にリタルさ……リタルに書いてもらった進路希望調査表によると、彼女自身は特に展望は無いそうなんですが……」

「だから、泥棒アシスト」

「リタルさん、……リタルは成績も良く、とても優秀な生徒さんですから、どこへ就職されても問題は……」

「ドロボウアシスト」

「……リチウムさんっ！ ちょっとはまじめに協力してくれたらどうですかっ」

半べそをかいた女教師がついに立ち上がった。

見上げれば、女教師は細い肩をふるふると震わせている。……やっぱこうなったか。少女は心の中でボヤきつつ頭を抱えた。

「なんだグレープ。俺様は至って真面目だが」

真顔で即答する男を前に、女教師はさらに情けない表情を浮かべつつ、

「だって、『ドロボウアシスト』なんて、そんな事書けません……」

胸の前でぶんぶん両の拳を振る。

「書けないも何も、将来どころかすでに現役なんだからしゃーねえだろ」

「ですが、ですがっ」

「……そうよ。そもそもなんだってアンタが来てんのよ」

唐突に、女教師の後ろから聞こえてきた不機嫌なアルト。それま少し離れた位置で黙って事の成り行きを眺めていた人物が、どこか不満げに会話に首を突っ込んできた。

「なんだ。居たのかクレープ」

女教師の後ろから顔を出したのは、女教師と瓜二つの顔を持つ人物だった。かろうじて髪型だけは女教師とは違い、ゆるやかなウェーブを描く長い金糸を頭の上で一つにまとめている。

男の声に女は不愉快だと言わんばかりに瞳のルビーを細めた。

「居たわよ。てか、明らかに気づいてたっばいのヒトの事無視して事を進めてたデシヨ。アンタたち」

「いやだってこれ学校行事だし。不良幽霊に出張ってもらってもさ」
「一体何度言い聞かせればそのツルテンテンの脳みそは皺を刻んでくれるのかしら？ アタシは幽霊じゃないってば」

不思議な事に彼女は宙に浮いており、その身体は背後の景色が見える程に透けている。

「……しっかし。まさかツルテンテンが来るなんて。アタシはてっきり、トランちゃんが来るかと思って待機してたのに」

不満丸出しの声を上げつつ、無然とした表情で男を睨む半透明の女。

「なんでだ」

「なんでよ」

男と少女の声がハモれば、半透明なその細面は途端にニンマリと悪巧みを思いついたような笑みを浮かべた。

『そんなアタリマエの事訊かないでよ。そっちの方がタノシイから決まってるデシヨ』

「クレープさんも真面目にやっってくださいあいつ」

顔を真っ赤にさせて、じたばたと抗議する女教師。

『なによグレープ。アタシは至ってマジメよ』

「つか、おまえだおまえ。そもそもなんだっておまえが『担任』やってんだよグレープ。本当は副担だろおまえ」

面倒臭いと言わんばかりに整った顔を歪めた男が問うと、

「サンキューで臨時で仕方ないんです」

再びじたばたと主張を唱える女教師。

「サンキュー？」

『産休』

「ああ」

「今この教会、シスターの数が足りてないんです、だから仕方ない

んですっ」

『引き受けないっててもあったじゃない。アンタが受けてなきゃ学園だって、他のトコから助っ人呼び寄せるなりしてたデシヨ』

「頼まれたから仕方ないんですっ」

「……断れなかつたんだな」

「うく……っ」

『ユージューフダンだから』

「ですが、この教会には私もお世話になってますから……何かお役にたちたかったですよ……っ」

男と半透明の女に挟まれ、明らかに劣勢、女教師。

喧騒を遠目に眺めていた少女は、後に残された面談待ちの生徒と保護者組を少しだけ哀れんだ。……これは長引きそうだ。

が、その予見をぶち破つたのは、誰であろう少女であった。

昨日と同様に、ポケットの中のナニカがブルってる。

ぎゃーぎゃーと喚く大人達そっちのけで、ポケットの中のナニカを確認する少女。瞬間、目を見開いた少女は男の名前を呼んだ。

「リチウム」

「んだよ」

「また出た。反応」

「んだって？」

「ここから近い。……移動してる」

「ってこた、やっぱり誰かさんが持ち歩いてるってこったな、今度のターゲットは。……楽勝！」

ニヒルな笑みを浮かべると次の瞬間、男はその場から駆け出していた。

「リチウム!？」

残された三者の視線がその背を追う。男は室内を窓へと移動しな

がら僅かに振り返った。

「後を追う！　ここでまた見失ったらいい加減フォルツェンドの名が廃るだろ」

「そんな、面談は……っ」

「やってられっか！　リタル！」

「らじゃ」

既に後を追っていた少女は、今にも窓から飛び降りようとしている男の首にしがみ付いた。

「ま、ま、待ってください！　ここは三階……！」
「わかってる！」

怒鳴り返すバリトンが窓の向こうから聞こえたと思えば、突然銃声のような乾いた音が耳を劈いた。慌てて女教師が窓に駆け寄ると……二人、ふわりふわりと宙に浮いていたりする。

『そっぴや、あのガキ。こないだ手に入れた禁術封石でオモチヤ作っただって言ってたけど……アレの事か』

少女が手にしている銀色の銃を視界に入れた半透明の女が、女教師の上で暢気に呟いた。

その間に地へ降り立つと、ポケットでブルっていた物体　　レー
ダーを持った少女を先頭に男は教会の敷地内を駆けてゆく。

「い、行っちゃいました……」

『ほら、アタシたちも行くわよグレープ！』

「へ？　ええ？」

『タノシソーじゃない！』

「で、ですが私には面談が……っ」
『来るの！ アンタがいないと、このアタシが活躍できないんだからっ』

「ええええええ！」

言うや否や、半透明の女は女教師に抱きつき……否、交わるように女教師の身に溶けてゆく。

同化すると同時に、女教師の体が淡く光った。

光の中、女教師の髪色は蒼から金へ。長さは伸び、髪質さえも変化する。

瞬く間で光は消え、そこには半透明の女の外見そのものになった女教師が立っていた。

「借りたよ！ グレープ！」

声まで半透明の女のものに変質している。

事後報告もいいとこ、女教師の身体を乗っ取った半透明の女は既に教室を駆け出しており、内に入ってしまった精神が正気を取り戻す頃、その体は窓から飛び降りていた。

宙を流れるゆるやかな金髪。

（ええええええええええええ！）

内で叫ぶ本体そっちのけで、女の表情は楽しそうだ。

『浮遊！』

言葉と同時に女の体が再び淡い金に包まれる。瞬間、特殊な力が作用し、重力下に置かれているはずの細い体はふわりと宙に浮いた。

「ヨッシャっ 行くわよ！」

嬉々とした声を合図に加速するスピード。遠ざかり小さくなって
いた男達の後を彼女”達”は空から追う。

背後の建物 三階の窓から、自分達を探す大声が微かに耳に届
いた。騒ぎに駆けつけた残りの面談組だろう。内に入っている女教
師は、まさに心の底から、ただひたすら彼らに詫び続けるのであっ
た。

e n d .

1

サファイア色の髪。ルビーのような紅い瞳。清楚な巫女服に身を包み。鈴の音にも似た声が鳴る。

グレイプ・コンセプト。

彼女と接した人は皆こう言う。黙って突っ立っていれば文句なしの可憐な美少女。

だがその実態は 歩く破壊魔。

1

「もおおお！ どうやったたらんなトコ入れんのあんたが！」

休日の穏やかな昼下がり。突如として響いたリタルの喚き声が、1101号室で雑誌を読みふけていた不幽霊、クレープの耳を劈いた。

何かと玄関をすり抜け廊下に出ると、すぐにリタルの不機嫌^{フルスロット}全開仁王立ち姿が視界に入る。両腕を組んでじたんと片足を鳴らし、迸る怒りのオーラで頭の上で二つに編まれた黄緑色の髪をゆらゆらと揺らしている。

『何やってんのよ』

クレープの声に振り返ったリタルは一層不機嫌を露にした。

「何もへったくれもないわよ！ こいつが！」

1103号室のドアをびしっと指差すリタル。クレープがそちらへ視線を向けるのと同時に、ドアを隔てて向こう側に居る何者かが、

状況を説明しようと鈴声を上げた。

『……ストップ。グレイプ。結果は？』

声で中に居る人物を判別し、やたら長引きそうなドン臭い説明を省くべく話の結末だけを促すと、

「ロックを壊してしまいましたぁ……」

なんとも情けない一言が返ってきた。

2

十一階建ての古びたマンションが彼女達のホームである。

ここ十数年で急速に栄えた都市部よりやや西に位置するこの地区は、所々に緑を残す静かな下町だ。

古い住居が犇めき合っている所にこのマンションだけがニョキつと空に背を伸ばしている。

築二十年以上は経過。相応に、あちこち剥げかけた外装や、天井や壁に走る蟬等、建物の至る所にガタがきている様子が見受けられる。故に住人も少ないのだが、調べてみると意外にしっかりと造りをしており、立地条件も良い事から、リタルが購入を決めたのがかれこれ二年前の話だ。

マンションには各フロアに三部屋ずつ設置されており、最上階に当たる十一階の三部屋をリチウムが買い占めた。

かつてリチウムとリタルは、1101号室からリチウムの住居、リタルの住居、仕事部屋と割り当てて暮らしていた。

しかし三ヶ月前から女性が増えた為に今では、1101号室を団欒部屋兼男住居、1102号室を女性専用住居、1103号室は仕事部屋としている。

振り分けはリタルの独断である。グレープ達との同居が決定して間もない頃、彼女は一枚の計画書を片手に一同を巻き込んだ大模様替えを実施した。

という訳で、彼女等は一日の大半を1号室で過ごす。2号室に彼女達が入り浸るのは主に就寝時のみ。故に、3号室にグレープが入りする事は日常滅多に無い事なのだが……。

「ったく……なんで3号室なんかに入るかなあ……。ここに寄り付けたロツクが一番特殊なんだから……」

頭を抱えるリタル。もう何度目だろう、やたら甲高い「すみません……っ」の音が扉を越えて頭上に降ると、それはそれは強大な溜息を吐いた。

『……本当に特殊みたいね。このアタシが入れない……』

幽体であるクレープが扉に手をついたまま、啞然とした表情で呟くと、

「当り前。アンタみたいな妙な生物がこの世に現存してる事を知って、このあたしが何の対策も練らない訳がないでしょう？ より完璧を求めてロツクの石を改造した事は言うまでも無く、幾度も改良を重ねたバリアーの石まで用いてこの部屋丸ごとコーティングしてんだから」

何を今更……とでも言いたそうな視線を、半透明の背に向けるリタル。

『うっそマジ？ そこまでしてあんの』

「その部屋にはイロイロ在るしね……って。たった今、その身を持

って証明してくれたでしょう？ あんた」

扉を凝視しているクレープの背に、リタルが呆れ顔で自身の額をツンツンと指す。恨めしそうな表情でリタルを振り返るクレープの額には……なるほど、巨大なタンコブが一つ君臨していた。

「さて、どうしたもんか。あたしの石の力じゃ中には入れないし……ぶち壊そうにも相当頑丈に強化しちゃったし……この扉」

腕組みして、今や開かずの間と化してしまった部屋の扉を忌々しげに睨むリタル。

『ココって仕事部屋よね？ アンタの造った機械がゴロゴロしてる』
「……そうだけど」

『なら、適当な機械使って中からドアぶち壊しちゃえばいいじゃない。クレープ！』

クレープの声に、中から嬉々とした鈴声上がる。

「ああ、そうですね！ 流石ですクレープさん。それではまず……こちらの、銀に光る銃をば……」

「駄目！ 絶対にだめー！」

悲鳴のような声を上げると光の速さでドアに詰め寄るリタル。

「あんた自覚無さ過ぎ！ いい加減弁えなさいよね！？ そうやって何度笑顔であたしの可愛い無抵抗な機械達の息の根を止めてきたと思ってるの！？」

「は、はい！ すみません！」

『つかしてないから息。無機物だから機械』

「とにかく！ あんたつてば一体どういう造りしてんだか、触つただけで機械はおるか本体なかの石ころだつて一瞬で再起不能に至るまでにぶっ壊しちゃうんだから！ 歩くストーンクラッシュャーなんだから！ もうこれでもかっつー位、破滅的に石という石総ての属性と相性悪いんだから！ だからもお大人しくしてなさいいいわね！？」

敗北一色に染まった声が扉の向こうから返ってくる。「まったくもおお……」と肩で息をしながら、リタルはドアから一歩だけ後退した。

『……どーすんのよ』

『機械が壊れるのがそんなに嫌なら、魔石ほんたいをグレイプに触らせて壊しちゃうつてのは？ アンタが仕掛けたんだから魔石の位置位記憶してんデシヨ』

「駄目。絶対に駄目。アレは最高傑作品なんだから」

頑なに拒むリタルの顔をジト目で見るクレープ。

『んじゃこの製作者せあに似た頑固なロック。どうやって開けようつての？』

「誰が頑固だ不良幽霊。……本来なら掛ける時と同様に、あたしかリチウムかが念じるだけでロックの解除もできるはずなんだけど……見たところ、これまた一体どうやったたらそうなっちゃうのつて、こつちがプライド捨てて訊きたくなくなる位にすんごく奇怪な壊れ方してるし……」

先程から一点を恨めしげに見ているリタル。視線を辿ると、灰色のドアノブが見落とす程鈍い光を放っている事にクレープは気づい

た。どうやらそれがロツクの石、なるものらしいが。

『奇怪って？』

「あのコがこの部屋に入れた事からして既に奇怪だし。それに幾らこつちが働きかけても発動はおるか反応すらないのよ。全く。ちつとも。魔石のクセに。ひよつとしたら魔石の性質とか……属性そのものが変わっちゃってるのかも」

『そんなことってありえるわけ？』

「さあ。でも実際動かない訳だし、そうとしか思えない。そんな訳で、ロツクを直すのは不可能に近いわ。……かと言って。扉の頑丈さはさつき言った通り。壊す事は愚か、どんなふざけた造りした我仮幽霊も通さない」

『喧嘩売ってンなら買うわよ？』

「かなり惜しいけど、こうなったらあなたの言う通り、石そのものを……ロツクを破壊した方が……早いかも」

クレープの放つ殺気を完全に無視して、眉間に皺を寄せたりタルが組んでいた片手を口元に持ってきて唸った。

『それならやっぱリグレイプに触らせるのが一番手っ取り早いと思っケド』

「破壊した所で素直に機能を停止してくれるか解らないし……っていつか、こんな無残な状態すかたになってしまったこのコにそんな最期を課すなんて嫌」

『なら、一体どんな素ン晴らしい最期をお望み？ 親御サン』

「出来れば苦しまずに……一瞬で楽にしてあげたい」

『要するに禁術封石で木っ端微塵にしると』

「そんな残酷こつこ言ってない。……まあ、あなたの言っとおり、禁術封石を使うしかないでしょうけど」

『つつたつて、トランちゃんはお仕事だし』

「このクソ肝心な時にリチウムは出ちゃってるし。あたしの機械達は全部この中。……大人しく男どもの帰りを待つしかないわね」

「お手上げ状態」と小さな肩を竦めてみせるリタル。

『……だ、そうよ。アンタしばらく閉じ込められてなさい』

クレープが声を上げると、ドアの向こうから「はい……」と、くぐもった返事が返ってきた。

彼女と最も付き合いの長いクレープはその様子をリアルに思い浮かべる事が出来た。どうやら体育座り《ひとりはんせいかい》を執り行っているようだ。

3

「フーかあんだ。なんだって3号室なんかに入ったのよ？」

扉を背凭れに廊下に座りこんだリタルがドアを振り返って尋ねると「それが……」と弱々しい鈴の音が返ってくる。

「今朝、リタルさんに造ってもらったモノが嬉しくて……つい。入る時に、扉がすんなり開いたので、てっきりリタルさんやりチウムさんが中に見えるのかと思って、声をかけながら入ったのですが……結局どなたもみえなくて。部屋から出ようとしたら扉が開かなくなってしまうって……」

グレープの言葉に思い当たる節でもあるのか、露骨に表情を歪めたリタルがまたしても大きな溜息を吐いた。

『ナニソレ。アンタあのコに何造ったの？』

宙に寝そべっていたクレープの問いにしかし、下げた顔を上げる事なく口を開くりタル。

「……………掃除機」

『……………は？』

「だから。掃除機よ。……………このコ、そこから売ってる機械は触るだけでぶち壊しちゃうもんだから、いつもホウキとチリトリ持って長時間バタバタ駆け回って掃除してたの」

グレープ達が住み着くようになる前まで、三部屋の掃除は勿論、一切の家事をリタル一人が担っていた。

完璧主義な彼女。やるからにはと教会から帰ってきた後の空き時間を費やし、それこそその筋のプロにでもやらせたかのような仕事っぷりを発揮、こなしてきた。

大好きな研究の時間を深夜に廻したその結果、日々寝不足。生気さえ感じられなくなってしまったその顔色の悪さが、いわゆる「病弱」に拍車をかけていたのだが。

その様子を見たグレープが、居候の自分が家仕事をやると申し出たのだ。

これで大好きな研究に専念できる！ リタルは勿論、嬉々として掃除機を手渡した。

……………直後。初めて一同は、恐ろしく無邪気な破壊魔の絶大なる力の片鱗を目のあたりにするのだが。

「だから、普通の掃除機に手を加えてグレープにでも扱えるような代物に改造してあげたのよ。……………確かに掃除機は壊れなかったみたいだけど」

「すみません」

『アンタのたまの親切心も裏目に出たって訳ね。いままでの惨劇か

ら考えてこのコ、表に出る位感情高ぶってる時が一番破壊力増すみたいだから」

「……すみません」

「てか、グレープ。今更だけど相性悪いにも程がある。転校したての頃、クラスメートからあんたの話聞いた時は一体どんな冗談だと笑い飛ばしてたわよ。普通、どんなに相性の悪い属性ませきがあるうが発動出来ないだけで済むし、決して破壊には至らない。それに人間一つ位は相性の良い属性がある筈だしね。……実物は噂を軽く超えたトンデモ人間だった訳だけど」

「すみません……。わたしも学園アイオンではそう教わってきたのですが……使えたためしがないです」

「……かと言つて、こっちの幽霊の存在もそれ以上に不可解だけど」

顔を上げると、今度は宙に浮かぶグレープにジト目を向けるリタル。

「こんだけ好き勝手出来るユーレイなんて聞いたこともないし。……んつとに二人ともどういう造りしてだか。一度バラして見てみたいわよ」

『ヤメテよ。アンタが言うと冗談に聞こえないんだから』

「3/4本気よあたしは」

『リアル過ぎだから。その言い方』

「しっかしトランは仕事だからしょうがないとしても。リチウムは一体どこほつつき歩いてんのよ。……いつもだったらこの時間は部屋で爆睡してんのに」

『さア。アタシはてつきり相棒のアンタが把握してるとばかり思ってたから』

「夜はともかく、昼間の行動まで干渉されたら嫌でしょう、お互い」

「あ。リチウムさんなら……」

『ナニ』

「確か、ファールンさんの所にいらっしやると思えますよ？」

グレープの声に揃ってゲンナリとした表情を浮かべる二人。

「……なんでよりもよってんなトコに居る訳アイツは……」

『蘇るクレンザー臭……』

「やめてよ」

「なんでも、売り捌きに行く、とか」

「ああ……こないだのハズレね」

言ってリタルはつい数日前の出来事を思い浮かべた。三者面談を放り投げてまで盗りに行った石は、とにかく使い道の無いふざけた禁術封石だった。

「それこそファールンは好きなんじゃない？ 『念じれば念じただけ花が出てくる石』なんて」

『花屋に売れば儲かりそうなモンじゃない』

「一般人は買わないわよ禁術封石なんて。幾ら商売の為つつたつて、人間止めたくないでしょうし」

「わたし、結構欲しかったんですけど」

「……冗談でもやめてよ。あんたが触ったら一瞬で花地獄よ花地獄」

グレープが触って、石が暴走して、石から生まれた大小様々な花が見境なく吹き乱れるという惨事。瞬く間に花に埋め尽くされていまう自分を想像してみる。ちくちく痛いわ、痒いわ、臭いわ、息できかないわ……、

『……うわサイアク』

整った顔を極限まで顰めるグレープ。

「……ま、いいわ。とにかく場所が分かったんだから。あたし行ってくる。最悪、リチウムの帰り、夜になるかもだし。いつまでもグレープ一人部屋の中に閉じ込めたままってのも寝覚めが悪いし」

気を取り直して立ち上がると、左手にポケットから取り出した指貫グローブを装着するリタル。

『奴のトコ？ 禁術封石で行ったら間違いなく捕まるわよ？』

「大丈夫よ。近くまで跳ぶだけだし。……そもそも見つかるようなへまなんて、あたしはしないわ」

装着した左手をグーパーさせながら「あたしは」をやけに強調させたリタルがニヤリと笑う。

『くおのガキヤ……っ』

「んじゃ、ちよっくら行ってリチウム連れて帰るから。頼むからもう少し大人しくしててよグレープ」

リタルが左手に意識を集中させる……と。

「あ、あの」

グレープの声がそれを中断させた。

うんざりした表情でリタルが扉を振り返る。

「なによ？ まだ何か……」

「す、すみません。でも……」

返ってきたのは、心底申し訳無さ気な

「ありがとうございます。リタルさん」

どこか嬉しそうな鈴音だった。

エメラルドの大きな瞳をさらに見開いた後、

「……………べ、別に！」

リタルは一際大きく発声すると、どこか機械的な動作でぐるりと扉に背を向ける。

「何も、あんたのために行くって訳じゃないわよ！？ どーせ暇してたし……………っていうか、あんたの行動読めなかったこっちにも落ち度はある訳だし、それに……………これ以上あんに機械達を壊されちゃたまらないから行くだけなんだから……………！」

怒ったように言葉を吐き捨てながら、左手を頭上に翳した。

瞬間。グローブの甲に当たる部分に取り付けられた手の平サイズの石が、シュオオオオ……………という「声」を発し、淡い緑の光をその身に灯す。

刹那、光が膨張し、包み込んだリタルの体を場から掻き消してしまふまで、僅か数秒。

垣間見たソレに驚いたクレープは僅かに紅い瞳を見開いた。

やがて、静けさを取り戻した廊下で一人、ニヤニヤと笑みを張り付かせたクレープが扉の向こうへ語りかける。

『……………ネエ？』

「はい？」

『やっぱりアンタと居ると退屈しないわ』

「……………はい？」

『オモシロイもん見せてもらったわよ』

消える直前の、耳まで真っ赤にさせた横顔を思い浮かべてはクツクツ……と愉し気な笑みを零すクレープ。
歳相応の、幼い顔。

『案外カワイイとこあんじやない。あのガキ』
「? はい?」

自分と同じ顔を持つ少女の言葉の嬉しそうな響きに、扉を挟んだその向こうでクレープの表情は益々困惑色に満ちていた。

4

「みなさん、ご迷惑おかけして本当にすみませんでした……っ」

1号室。だらけた空気の支配するリビング。その入り口に立ったクレープが、生きる屍達に深々と頭を下げる。

その後 大凡の場所を見当づけて跳んだリタルは、少しの狂いもなく、とある路地裏に転位していた。

リチウムが連絡を取ったとすれば、ファーレンが指定する場所は（よりにもよって）グノーシスに在る警察機関、中央警察署の近くにある寂れた喫茶店だろう。

リタルも何度か同席した事がある。照明は暗く、コーヒーは不味く、慇懃無礼な店員が一人で接客している、到底流行りそうにならない店だ。

そこまでは楽に予想がついた。

『転位』の禁術封石付きグローブをミニスカートのポケットに捻じ込んだリタルは、窓から店内の様子を覗き見ようと背伸びをした。

「……………んん?」

……のだが。窓を覗くなり、リタルは眉を顰めて低く唸った。ナニカがびっしりと窓に張り付いていて、中の様子がまるで見れない。

さらにぼんぼん増えてゆくそれを、リタルは冷静に観察する。赤白黄色、大中小。どれもこれもひしゃげてはいるが、色々な形をした

これらは……、花だ。

窓に張り付いていたのは、様々な形状、様々な色合いの花、花、花……。

「……なに、これ」

室内から漏れる悲鳴が徐々にくぐもってゆく。

「……まさか」

リタルの脳裏を過ぎったのは、数十分前に発した自身の声だった。

『花地獄よ、花地獄』

様々な花に、隙間無く埋め尽くされていく。侵略は決して店内だけにとどまらない。服の中にも、口腔にも。耳にも、鼻腔すら。穴という穴を求めて花は増え続ける。小さく可憐な花達が、人体を侵していく

店は今、未曾有の花災害に見舞われていた。

開店以来最大の騒動がこの時巻き起こっていたのだ。

「う、うそでしょ……？ い、一体何やってんのよあいつは……」

青ざめた顔で二、三步後ずさりするリタル。

そんな彼女の視界に無情にも飛び込んできたのは、窓を蹴破って登場した必死の形相の青年　リチウムと、その後を追って一気に雪崩れこんでくる花津波。……ついでに、花と一緒に流れてくる老いぼれ客達と無愛想な店員

「って、なんで居るんだこの馬鹿ー！」

「い、いやああああああああああー！」

かくして、静かな裏路地に見事な花地獄が展開された。

予定していた時間より大幅に遅れて帰宅した二人は、見事な花の香りに包まれていた。

「うへえ……」

仲良く花に酔った二人。土気色の顔のまま事務的に事を成しグレイプを助け出すと、礼を言うグレイプそっちのけでよろよるとリビングのソファに突っ伏してしまい、日もとっぷり暮れてしまった今に至るまで死体のように動かない。

「ひでえメに合った……」

グレイプの何度目かの謝罪に、死体一步手前のリチウムがようやく反応を示した。

『上級天使をマジギレさせるアンタがいけないんデシヨ』

「俺様はからかっただけだ……本気にとる野郎が悪い」

「天使相手に喧嘩売る人間なんて、世界広しといえど、あんただけでしょうね……」

『つか、一体なんて言って怒らせたのよ?』

ふいよふいよと寄ってきたクレープを抑揚のない瞳で視界に入れると、リチウムは一言。

「『おまえの母ちゃんデーベソ』」

「……禁術封石密売に行つて……一体なんだってそんな低レベルな会話に……」

『泣くなりタル。……しかし、そんなんで怒髪天する上級天使つて一体……』

「……マジだったらしい」

『は?』

「……いやだから、マジでアイツの母ちゃん……」

「……」

『……』

「お二人のお花の香りがお部屋に移ってきましたね」

土色の三人が絶句している中、一人上機嫌なのはグレープだ。

「……喜んでるトコ悪いけど、窓開けてくれない? グレープ。吐きそう」

「あ、はいはい、ただいま……」

「ドアも頼む」

「はい」

せかせかと小走りで動くグレープ。ドアを開けようと玄関まで移動すると、

「あーったく……! 酷い目にあつた……っ」

ボタンと乱暴にドアを開けて、着崩したスーツの上に薄手のロングコートを羽織った黒髪の青年が入ってきた。歳はグレイプと同等に見えるがこれでも今年二十一歳。何故か年中羽織っている古びたコートがトレードマークだ。

「トランさんお帰りなさいです。お勤めご苦労さまです」

グレイプの笑顔を視界に入れるや否や、途端に顔を赤くさせる青年。

「た、ただいま。グレイプちゃ……！」

『おつかえりなさああい！ トランちゃああああん！』

突如場を裂いたのは、リビングの方から発射されたハート乱舞の大声だった。不思議そうにそちらを振り返ろうとしたグレイプをすり抜け、トランと呼ばれた青年の首にクレイプがしがみつく。

「って、抱きつくなクレイプ！」

慌てて引っぺがしにかかるトランだが幽体の彼女には意味が無い。必死の抵抗もスカスカと通り抜けてしまう。

「お二人とも本当に仲がよろしいですね」

グレイプの穏やかな一言がトランの全身を落雷のように打ち砕く。

「だ、だから違……、違……ってグレイプちゃん、これは……！」

お幸せに、と言わんばかりの満面の笑みを浮かべてトランの脇を擦り抜け玄関へと移動するグレイプの背中に蒼白の顔でじたばたと

抗議するトラン。その頭に、半透明の腕が絡みついた。

『あらグレイプ、当たり前的事言わないでよ……って』

トランの頭に顔を寄せたグレイプが眉を顰めた。

『ねえ、トランちゃん？ この香り……』

両膝に手をつき、ため息を吐いてから、トランがげんなりとした表情で身を起こした。

「香り？ …… ああ。今日中央署の裏で妙な事件が起きてさ。禁術封石絡みだったんだが……その後始末に回されちまって」

仕方なくグレイプを首にぶら下げたまま、ぎしぎしと鳴る廊下を歩くトラン。グレイプは玄関を開放してドアストッパーを置いた後、ててて、と小走りでトラン達の後に続く。

「そついや現場に向かう途中でファーレンを見たんだけど……奴、なにか知らんが妙に機嫌悪くてさ。……まあ、せいぜい普段買ってる馬鹿高い洗剤『ゴージャス』が品切れだったとか、愛用の高級ゴム手袋『セレブ』に穴開いちゃった、とか、そんなとこ……」

と、そこまで言い終えてからようやく、リビングから漂う 否、既に廊下にまで充満している嗅ぎ覚えのある匂いに気づくトラン。
匂いの発生源は言うまでもなく

「……よ。お勤めご苦労。トランちゃん」

リビングの入口で硬直したトランの視界で、未だソファに寝そべ

っている半目のリチウムがふてぶてしく片手をひらひらさせている。

「……………てか。元凶はまたおまえだったのかよりチウム！」

瞬間、トランは鬼の形相でリチウムに詰め寄る。

「はっはっは。トランちゃん、怒っちゃイヤ」

「気味の悪い声を出すなー！ あの花、始末すんに俺らがどんだけ苦労したかおまえ解ってんのか!？」

「ンなもん知るか。解りたくもねえ」

「おまえなああああああ！」

突如リビングで巻き起こったデッドヒートから、迷惑極まりないといった表情で這ってキッチンへ避難するリタル。

「ったくもおお……………、毎日毎日よくも飽きもせず」

『ちよっとリチウム！ トランちゃんに怪我でもさせたら承知しないからね!？』

「あ、あの、お二人とも、喧嘩は……………っ」

止めようとグレープが駆け寄ると、その足元へ、コロン、と何かが転がり落ちてきた。

見ると、半透明のビニールの袋だ。中に何か、小石サイズのものが入っている。

「……………？ あの、何か落しましたよ？」

グレープの声に、トランがギョツとなってそちらを振り返った。

「って、グレープちゃん！ 駄目だ、それは……………っ！」

トランの大声にその場に居た者全員が目撃した。
が、彼らの視界はそこで、色とりどりのナニカによって塞がれて
しまう。

刹那解ったのは、部屋中に充満していた香りが一気に膨張した、
という事。

時刻は深夜十一時。闇のベールに包まれ、昼間の喧騒も今はすっ
かり鳴りを潜めている。

ようやく眠りに付こうとしていた街に、静寂を切り裂く断末魔の
絶叫が轟いた。

end .

前編

「……………ネエ」

ふわふわと腰まで伸びた艶やかな金髪が頭の動きに合わせて揺れる。

「まだ、生きてる？」

整った細面の女の赤い目が、右隣に在る小さな影を見遣った。

「……………生きてて悪かったわね」

掠れた声とともに、重く閉ざされていたエメラルドグリーンの瞳がうつすらと開かれる。

「あ、すごい。起きてたか」

「……………あんたと違って、さすがに……………もうヤバイけどね。しっかし」

そこまで言う少女は僅かに顔を上げた。頭の上で二つに編まれた黄緑色の髪がさらりと動く。尤も、動かせるのは首から上のみだ。後の自由は……………辺りの様子が把握できない程暗い洞穴の中、壁一面に張られた白い糸によって奪われている。

「一体、何時間『夢』を見せる訳？」

眼前に広がる闇を、力なく少女　リタルは睨む。

「朦朧として掴めてないだけで、実際はそんなに時間経ってないのカモ」

「……そうかもね。だけどクレープ、あんたが幽体に戻れないなんて……」

「十中八九コノ系のせいデシヨ。『拘束』つての、肉体だけに作用する訳じゃないみたい……残念ながら。しかも……気づいてる？」

コノ系、アンタが持つてる禁術封石の魔力を吸い取って、未だに伸び続けてる」

身動きが取れないのは、金髪の女　クレープも同じだった。

二人は今、粘着力のある白糸に両手両足、体中を囚われ、壁に磔にされていた。

幾重にも絡んだ細い生糸。しかし、ここまで見事に拘束されたのは、彼女達の抵抗の証でもあった。

もがけばもがく程、強靱な糸は体に巻きついてくる。

破壊系の禁術を使えば、糸はその魔力を包み込んで膨張、増殖する。

悟った彼女たちが一切の動きを停止した時にはもう遅かった。体中に絡んだ粘糸は、それ自体に意思でもあるのか、二人を完全に捉えた後も徐々に伸び続けていき……今や辺り一帯に大きな幾何学模様を形成している。

「はぁ………つたく。どつかのオコチャマがとっ捕まったりするもんだからこのアタシまで標本にされちゃったじゃないの……。はぁ………真つ暗でじめじめしてて。隣には、口だけはお達者なおドジのオコチャマ。……サイアク」

「……悪かったわね。おドジのオコチャマで。っーか。あんたが捕まったのはあんたのミスでしょう、あたしのせいじゃないで。そんつなにこの状況が我慢ならないのなら今すぐあたしを助けてみなさいよ。転位ひとつ飛びで連れて帰ってあげるから。ほらほら」

「それが出来ればクソガキ小突いて遊んでないって……。はあ……
…散々探してやったつてのに感謝の「か」の字も示さない……。迷
子になったのならそれらしい態度をとってくれないとき。温厚なア
タシもさすがにやりきれなくて愚痴の十や百は零したくなるって
なモンよ……」

「温厚で。感謝がほしいなら心配の一つもしてみなさい。どうせあ
んたの頭の中は好奇心以外の何物も詰まってるんだから」

「金塊ならぬ愛塊で出来てるこのアタシに対して失礼にも程がある
デシヨ」

「原材料が愛の塊なら、こんなに憎たらしい性格してるはずない」

「心配ならちゃんとしてたわよ？ 勿論アンタのじゃないケド」

「……いつになく突っかかってくるわね。そんなにこの状況が不快
なら、そもそも探しに出たりしなきゃよかったじゃない。ホームは
完全防備なんだから、我関せずでぬくぬくごろごろしてれば良かった
でしょう。いちいちグレイプまで巻き込んで何でもかんでも首つ
つこんでくるあんたが悪い。っていうか今回あんたが重い腰あげて
動いたつてのが、こっちは不可解極まりないんだけど」

「そりゃあ。アンタだけじゃなかったんだもの」

場には囚われの二人の少女の他にも、もう二つ、気配があった。

「……不快なのは糸だけじゃないしね」

二人の目前に広がる闇の奥で、言葉もなくただ自分達を見ている
黒い影がある。濃い闇に紛れて、その姿を肉眼で捉える事は出来な
い。

そしてもう一つは

「……トラン、は、寝ちゃってるみたいよ」

小さな顎で、自身の右側を指すリタル。

「そーね。さつきからナニ話しかけても答えてくれないもの……」

クレープの白い額に幾筋もの血管が浮き出る。

「魔族如きが！ アタシのトランちゃんにナニかましてくれてんのよ……っ」

「……だから。記憶を覗かれてるんでしょ」

横でリタルが溜息交じりに突っ込みを入れる。

「アンタがさつきから爆睡してたのって、ソレが原因なの？」

「爆睡で。……まあ、恐らくはね」

「なんでそう言いきれんのよ」

「あたしずつと、夢みてたから」

「それはさつき……アンタが寝ちやう寸前に聞いた」

「問題は夢の内容。ここ最近、実際に起きた出来事ばかり見てるのよ」

「けど『夢』って、普通にそついう……過去に起こった事を見ることもあるんデシヨ？」

然したる理由にならない　そう答えるクレープに、リタルは思案する。

幾許かの沈黙の後。

「……『夢』の最後」

聊か疲れた声でリタルは口を開いた。

『夢』の異常さ。最も奇妙な点。何故、自分はアレがただの夢で

はないと感じたのか。

それは……。

「最後？」

「……夢が終わると、一面真っ暗になって。『end』って白文字が出るの。それから現実に戻る」

奇妙さにぞっとして。背筋が凍りついた後、間もなく、この闇に還るのだ。

「そんな映画じみたふざけたの、ただの夢のはずがないじゃない」

今度こそ、クレープに反論はなかった。

「……どんな記憶、覗かれてんの」

「さあ。あちこち無差別って感じ」

「さっき寝てたのは？ どんな記憶？」

「……こないだの花地獄の時のよ」

うんざりしたように答える。

「……………ウゲ」

惨劇を思い出したのか、顔を顰めたクレープが小さく呻いた。

「最近の記憶……それも色の濃いものを順番に覗いてるんでしょね。トランの意識がないのも、今覗かれてるからじゃないかしら」

リタルの言葉にクレープの眉根がぴくりと動く。

トランの記憶。アレも覗かれているのだろうか。つい最近見た情

景が、クレープの脳裏を過ぎる。

赤い世界。炎に照らされた、細身ながらも逞しい背中は一瞬、僅かに震えていた。しか

……アレも。

「クレープ？」

無言を不審に思ったのか、リタルが顔を上げる。

前方を睨むクレープの赤い瞳には今、強大な怒りが宿っていた。

「……ぶっ殺す」

1

その少年は、業火の中で生まれた。

総てのモノを焚き、愉し気に盛り狂う炎火。

無邪気に跳ねる。爆ぜる唄に合わせて舞う。踊る紅蓮の創った赤

い赤い世界。

そんな地獄に、少年はただ立っていた。

炎威はもうこの身には届かない。

だから少年は今ここで、総てのモノを消し去る事も出来た。

総てのモノを、護る事も出来た。

もう一度捨てる事だって出来た。

しかし少年は、手にしたソレを堅く握り締めた。

その瞬間から 彼は、彼として、生を歩む。

過去は『総てのモノ』と共に焼き払ってしまった、当に無い。

その瞬間、彼は業火の中で生まれた。

……きつと。その身も、その意思も。その生すらいつか。この焦熱地獄に還るのであるうと。

契約の刹那、彼は悟った。

病院で簡単な処置を受けた後、青年は一人物思いに耽っていた。黒の短髪で中肉中背。アイロンの行き届いたワイシャツにズボン、黒の革靴……と、一見新人サラリーマンのように見える青年の着衣は煤でひどく汚れていた。

中でも腕に抱えているロングコートの汚れは格別だった。年代物なのか、ただでさえ皺や糸のほつれなどが目立つ草臥れた生地である。意地の悪い同居人から幾度も捨てると罵声を浴びせられた拳句、実際に幾度もゴミ袋に入れられた経験を持つ不憫なコートはもはやボロボロと言っても良い程だったが、それでも青年は大事に抱えていた。

処置室に面した廊下は、外来時間が終了してしまったのか、無人だった。

時折白衣姿のスタッフが慌しく駆けて行く。

壁際に並べられた黒い長椅子の一つに腰掛けると、青年の意志の強そうな黒瞳は一点を見つめて静止した。

思い浮かべるのは、病院に向かう直前まで身を置いた赤い世界だ。あの地獄は既に消え、自分は病院に居るというのに、まだあの世界から抜け出せていないかのようにリアルに感じる事が出来た。……いや、実際の所、青年は未だ赤い地獄に囚われたままだった。

思考だけではない。網膜を通して脳裏に焼きついた映像。耳を通じて鼓膜に焼きついた音。皮膚に焼きついた温度。思い起こそうと思えば容易に、この体の何もかもが忠実に再現してくれる。燃え盛る炎。燻ぶる火。焦げた空気。息苦しい空。一面の焼け野原。そして、一体の真つ黒な焼死体

「……子供は軽い火傷で済んだそうだ」

「ニタさん」

低い声に我に還る。

奥からこちらへ向かってくる、がっしりした体型に背広を着込んだ五十歳前後の男　ニタバーニ・ゼネラックを視界に入れるなり、青年は慌てて起立しようとする。

それを片手で制止し、ニタバーニは廊下に靴音を響かせながらゆつくりと青年に歩み寄った。

「良くやったな」

日焼けした顔に、開いているかどうかも解らない程細い垂れ目。ニヒルな笑みを浮かべてあちこち処置された青年の顔を見た。

つい数時間前の事。グノーシス東部の住宅街で起こった大規模な火災現場に偶然居合わせた青年は、炎の中孤立していた子供を単身飛び込んで助けた。倒壊する家屋の中を間一髪、子供を抱えて戻ってきた青年は、奇跡的にもかすり傷程度で済み　現在に至る。

意識の無かった子供はこの階よりさらに上にある集中治療室にて治療を受けていた。

青年は立ち上がると生真面目に頭を下げた。

「どうした？」

「二階の窓から子供の姿が目に入って……すみません俺、居てもたつてもいられなくて……また迷惑を」

肩に置かれる温かな重み。言葉を止め青年が顔を上げる。

ニタバーニは笑みを浮かべたままだ。

「駆けつけた消防隊の制止を振り切って飛び込んだって訳か。しかし、運が良かったからいいものの、あの状況じゃ十中八九おまえ

の命は無かったぞ。今だから言えるが、俺は絶望視していた人間の内の一人だ」

腕を組み、陽気に笑う。しかし青年は浮かない表情で足元を見た。

「まあ、無事だったから良かったがな。おまえの親父さん　総監もさぞ喜ばれる事だろう。感謝状……いや、もしかしたら本庁への移動を言い渡されるかもしれんぞ」

「それは」

「解っている。受けないと言つつもりだろう」

「は」

瞳を僅かに見開いた青年。視点を上げると苦い笑みを浮かべているニタバーニと目が合う。

「そつやって、おまえは幾度も……昇進の話をも断り続けてきた変わり者だからな」

言葉を失った青年の黒い瞳が僅かに泳いだのを、ニタバーニの糸目から覗くダークブラウンが捉えていた。

「だが、トラン。おまえもそろそろいい歳だ。警察中央学校出で然るべき位置に就く事は約束されているとはいえ、此処に踏み留まっているのも潮時じゃあないか？」

「……………」

「理由は俺の知り得るところではないが。断る事は簡単に来る。

……だが、一度よく考えてみる。おまえにとって何が最良か」

「……………はい」

「ゼネラック警視、クイロ警部」

手にボードを持ったスーツ姿の若い男が靴音と共にこちらへ駆けてくる。

「なんだ」

「先の事件ですが、焼死体の鑑識結果が出ました」

「……早いな」

「大至急報告するように、とのクイロ警部の命を伝達したままで」

どこか引つ掛る物言いに、ニタバーニがチラッと青年 トランの顔を見遣る。それに気づいているのかいないのか、真剣な横顔を崩さぬままトランは先を促した。

「原因はやはり」

「はい。警部の睨んだ通りでした」

返ってきた答えに、しかし見据えていたはずのトランの表情は落胆の色を帯びる。

短い白髭でざらざらとした感触の顎を片手で撫でながら、難しい顔のままニタバーニは低い声で呟いた。

「……禁術封石、か」

3

俺のはコレなんだ。

おまもり？

そうそう。これを持っていれば、どんな時も俺は強くなれるんだ。

強く……、

大事なものだ。おまえの母ちゃんが作ってくれた、そのお守

り。それと一緒にだ。

これと？

そうだ。だからおまえもそのお守り、大事に持ってる。

……………。

負けるなよ、な……………。

4

『お帰りトランちゃん。今日はやけに早かった……………って、トランちゃんどうしちゃったの!？』

1号室の扉を開けるなり、クレープの音が飛んできた。

ただし、トランを迎えたのは声のみである。『魔眼』の禁術封石^{いし}を所持するリタルが不在なのだろう。幽体であるその姿はトランの黒瞳に映らない。

「ただいま。ちょっとゴタゴタがあつてさ。しかし大げさなんだよな……………これ」

頬に貼り付けられた当て綿に手を添えながら、苦笑いを浮かべつつ廊下を歩く。今年二十一歳になるトランは、童顔と細身の背格好からか普段は実年齢よりも若くみられがちだ。しかし、今日の草臥れ方は彼を歳相応の……………いや、それ以上の年齢に仕立て上げていた。

『ゴタゴタって……………トランちゃんのコート、煤だらけよ？ その顔も……………怪我してんの?』
「大したこと無いよ」

ソファの上に使い古した鞆を放るとその上に、汚れたコートを置く。冴えない顔でネクタイを緩めながらトランはリビングを見渡し

た。室内は無人大った。響く刻音に目を向けると、閉めきったブラインドの上に掛けられた白い円時計の針は十九時を僅かに回っていた。普段ならこの時間帯には全員が帰宅して、空き時間を思い思いに過ごしているはずなのだが……。

「クレープ一人？ 他の連中は？」

『今は全員出払ってるけど……って、んな事はどうだっていいわよ！ 本当にダイジョブなの！？』

「見ての通りピンピンしてる」

『……火事にも巻き込まれちゃったの？』

「まあね。でもほら俺、火には縁があるつつうか強いつつうか。慣れてるんだ。なんでか現場に行くわす事が多いしさ。グレープちゃんと初めて会ったのも火災現場だったし。同僚にも消防隊に志願する、なんてよく言われるんだよ。何のために警中出たんだって話」

クレープの心配を元気に笑い飛ばそうとしたトラン。だがその甲斐なく、聞こえてきたクレープの小声は明らかに沈んでいるように感じた。

『トランちゃんの場合は、慣れてる訳じゃなくて……』

「え？ なんか言った？」

『……なんでもない。てか、トランちゃん。誰かに用でもあった？』

返ってきたいつものトーンに少しだけホッとして、トランは声のする方を振り返った。

「ああ。リチウムに話が……って」

ワイシャツのポケットに手をやり小さな巾着袋を取り出すと、トランはそこで動きを止めてしまった。

『どつしたの？』

中断してしまった会話に、そしてなによりトランの顔色の悪さに、クレープが訝しげに問う。

「……やっぱり」

独り言のようにトランが呟いた。

「オマモリが、無い……」

5

既に街には夕闇が降りていた。

時折北風が吹きつけ長い金糸を攫う。幽体であるクレープは気温を肌で感じる事は出来ない。それでも、季節は秋。日の暮れた野外の景色はそのルビーアイにどこか寂しく映る。

しかし、目の前にあるドス黒い塊の放つ物悲しさは格別だった。グノーシス市東部にある高級住宅街の一角。住宅展覧会よろしく、目を見張るほど豪勢で威圧感を放つ家々が立ち並ぶ中、目前の広大な土地だけ、全てが黒く崩れて形を失くしていた。

『ココ？ 現場って』

クレープの声に、彼女の足元でキョロキョロとあちこちを見回していたコート姿のトランが口を開く。

「ああ。数時間前に起きた火災現場だよ。あの時結構動いたし。病院にも問い合わせてみたけど届け出がないみたいだし。落としたの

なら多分ここにあるはず……って、ちょっとここで待ってて。訊いてくる」

作業員の中にスーツ姿の男を見つけると、トランはそちらへ走って行ってしまった。

『……「オマモリ」ねえ』

突風に緩やかなウェーブを描く髪が流れる。後ろで手を組み、遠ざかる背中を細めた瞳で見送りながらクレープは呟いた。

トランの言う「オマモリ」を、クレープは一度だけ目にしている。形状といい、性質といい、トランには全く似つかわしくない物だった。

一体誰の物かと問い詰めた所、昔、人に「オマモリ」だと言われて持たされたのだと渋々白状した。

小さな皮の巾着袋に入れたソレを肌身離さず持ち歩いているそう
だ。

……一体。どこのドイツがあんな物騒なモノ、渡したんだろう。射るような視線をトランの背中に向けていたクレープは、深い溜息をつく表情を緩めた。

『……完全に気づいて無いってのがまたトランちゃんらしいケド』

いつだって、疑いもせず物事を受け止める。人を受け入れる。彼は昔からそうだったのだ。それが考えなしの行動に映るのだろう。人は真つ直ぐな彼を鈍感とか馬鹿とか呼ぶけれど。アタシは、彼はそのままがいいと思う。

うんと頷いて　それからクレープは視線をトランの奥へ向けた。全壊した建物。焦げ臭い空気。眉間に皺を寄せる。クレープは辺りに漂う異質を感じ取っていた。

『ただの火事、じゃないわね。これは』

ただ一つ自分が気になるのは、彼がそれに気づいていたということだ。

ホームに帰ってきた直後　トランはリチウムに話がある、と言っていた。

あの様子。恐らく、総ての禁術封石を手放すよう、警告しようとしていたのだろう。これまでだって再三行われてきたやりとりだった。その度にトランが、リチウムやリタルにあしらわれているのをクレープは何度も目にはしている。その直前のトランの様子は　今日の帰宅直後のように、疲労していた。

トランは警察機関　それも、人界に在る総ての警察機関を統べる中央警察署に勤務している。本来、禁術封石を所持する人間を取り締まり、処罰する立場の人間だ。だというのに、何故彼がストーハンター　それも、コレクターの家に盗みに入る行為を主な活動としているリチウム達と同居なんてしているのか。……話せば長くなるのだが、トラン側の事情を掻い摘んで言う……まあ要するに、グレープやリタルを心配して居座り続けているのである。

しかし、それが彼の首を絞めていた。

自分は犯罪者を見逃している。それどころか成り行き上、たまに加担する事もある。そんなことで昇進の話を断り続けている愚直な彼が、肌身離さず持っているソレは、実は　でした、なんて事実を知ったら……。

結末は見えていた。

真実を知ってしまった時のトランの表情を、果たして自分は直視出来るだろうか。

紛失したというならば、いっそ。このまま出てこない方がよいのではないか

「クレープ」

呼ばれて顔を上げれば、いつの間に日の光は失せてしまったのか。驚く程暗い世界の真ん中で、外灯に照らされたトランの姿が自分を探して駆けてくる。

『見つかった？』

近づきながら、彼が見つつけやすいように声をかけてみたのだが、質問の答えはわかっていた。自分の声を頼りに近づいてくるトランの表情が冴えないからだ。

「いや……今のトコ無いみたい」

『探してみる？』

「ああ。けど、クレープは帰っててくれよ。……どれだけ時間が掛かるかわからない」

トランの表情にどこか悲痛な色を感じ取ってクレープは声をかけようとした。しかし、それを制するように片手を挙げて、トランはいつもの人懐っこい笑顔を見せる。

「付き合ってくれて、さんきゅな」

一言だけ残すと、トランは再び黒塊の方へ駆けていった。

6

それは、つい先日の話。トランは一人の少年と会った。

遅めの昼食をとる為に立ち寄った公園で、少年は一人、ブランコに乗っていた。

キイキイと空をきってブランコは飛ぶ。

視界に収めたトランは、さして気にする事もなく数十分前に買った菓子パンにパクついた。

その日の帰り。闇の降りた道を歩いていたトランは、通りかかった昼間の公園で鎖の軋む音を聞いて、なんとはなしにそちらを振り返った。

少年は一人、ブランコに乗っていた。

キイキイと空をきってブランコは飛ぶ。

視界に収めたトランは、少年に歩み寄った。

もう帰る時間だぞ？

それが出会い。

さらさらした明るい茶色の髪と瞳。歳の頃は十歳位か。少年はいつもその公園のブランコに乗っていた。

会う度、少年はいつも独りだった。幼い頃に母親と死に別れ、今は父親と二人暮しだという。

父親の帰りは遅く、独りの部屋は嫌だという少年はいつも公園に居た。トランはその日から、空いた時間をその少年と過ごすようになった。

他愛の無い話をし、一緒に菓子パンを食べ、一緒に遊ぶ。その繰り返し返し。

最初はおっかなびっくりだった少年が、見上げた先に在る人懐っこい表情に、つられて笑うようになったそんな頃。トランは、少年がいつも首から下げているお守り袋について尋ねてみた。

少年は僅かな沈黙の後で、亡くなった母親が自分に作ってくれたものだと教えてくれた。

トランは、お返しにとばかりに自分のオマモリを少年に見せた。

「俺のはコレなんだ」

「おまもり？」

「そうそう。これを持っていけば、どんな時も俺は強くなれるんだ」
「強く……」

「大事なものだ。おまえの母ちゃんが作ってくれた、そのお守り。それと一緒にだ」

「これと？」

「そうだ。だからおまえもそのお守り、大事に持ってる」

「……………」

「負けるなよ、な……………」

そんな会話を交わした、幾日か後。自分と少年の分の昼食を用意して訪れた公園で、ブランコを漕いでいた少年の胸からお守り袋が消えていた。

失くしてしまったと言う。

落ち込んでいた少年を励まそうと、トランは少年の手を引いて公園を出た。

先ず、映画を見た。それから、トランの行き付けの古い定食屋でご飯を食べた。散歩をして、ゲームセンターで撃ち合った。少年は楽し気に笑っていた。

それが、元気な少年の姿を見た最後だった。

さんざん遊び倒した後、公園の前で別れてから。それ以降、トランは公園に少年の姿を見ることが出来なくなってしまった。

毎日、空き時間に訪れる公園で、風に吹かれ力なく揺れるブランコ。……………それを幾度見たことが。

いつものように公園の入口に立ったトランは、公園の先にある住宅街から立ち昇る黒煙を視界に入れる。

急行したトランが見たものは 燃え盛る炎の中助けを求める、あのブランコの少年の姿だった。

ニタバーニから連絡を受けたトランは再び病院に急行していた。色濃くなった闇。面会時間を過ぎた病棟の暗い廊下を一人歩く。

『トランか。……俺だ。遺体の身元が解ったんだが……』

『……』

『……トラン、おまえ』

やっぱり、気づいていたのか……？

脳裏にニタバーニの声が蘇り、鼓動が再び大きく鳴った。気づかない、……訳がない。

火事の中、家屋に飛び込んだあの時。炎の海に、いつかの自分を見た。

赤い世界……それは、あの時と同一の業火。

オマモリを探す間、思い浮かぶのはあの少年の事ばかり。……そう、自分はずっと。否定したくて探していた。

否定したくて必死に、気づかないフリをしていた。

『母親は父親の暴力に耐えかねて自殺。その後も父親は息子を虐待していたらしい。体の衣服で隠れて見えない箇所は無数の傷があった』

辿り着いた個室の引き戸を、一瞬の躊躇の後、静かに開ける。

消灯後の室内に降りていた闇は、廊下のそれよりさらに濃厚だった。

冷たい床に裸足をつけて一人窓際に立っていた少年は、夜を彩る遠い灯りを眺めていた。

「……………」

重い雲が流れる天に月の姿はない。闇に灯る無数の光は、家々の窓から漏れたものだった。当然、ここからでは家の中の様子ひかりはわからない。それでも少年はただずっと。焦がれるように遠い灯りを見つめていた。

トランの後ろで病室の引き戸が閉まる。さらさらの長い茶髪は夜風に吹かれるがままに、気配に気づいて振り返った少年の表情を隠した。

「……………久しぶり。お兄ちゃん」

こうして、互いの姿を見るのは何日ぶりだろうか。

病室の入口と窓際。対面した互いの表情はわからない。

一瞬の沈黙の後。

「公園、で」

掠れた声がトランの口から出た。

「公園？」

「ああ……………ずっと待ってたんだぞ？」

そう口にするれば、嬉しそうに……………だが、申し訳なさそうに、

「……………ごめんね、お兄ちゃん。閉じ込められてて、会いにいけなかったんだ」

そう言って、小さな頭を垂れる。
か細い影が、トランの胸をどうしようもなく締め付ける。た
まらずトランは声を上げた。

「どうして……、……！」

「どうして？」

言葉を濁したトランに、小首を傾げる少年。

「予想はたくさん付くんだけだな。なんだろう……。そっだ、言
にくいんだったら、いつかみたいに当てっこしようか？」

トランの返事を待たずに少年は両腕を組んで唸った。

「どうして……お兄ちゃんのおマモリを盗んだ？」

「……違う」

「どうして……こんな事、した？」

「……違う……！」

「あれ？ 違うの？ じゃあ……」

押し黙るトラン。両手を握り締め、歯を食いしばる。 どうし
て、

「……わかんないや。……ごめんなさい」

どうして俺は、気づけなかったんだろう。

「……お守りをね」

いつになく口数の多い少年を、トランはもう一度顔を上げて、その黒眼で真っ直ぐに見る。

闇の向こうのその表情は視えない。だが、トランには見えている。相変わらず寂しそうに笑いながら、それでも自分と話したがってるのだろう。

「……母ちゃんが作ってくれたってやつか？ 最後会った時、失くしたって言った」

「そう、母ちゃんのお守り。あれね……」

「……」

「本当は、捨てられちゃってたんだ」

……どうして自分は、解ってやれなかったんだろう。

少年は決して無口なんかじゃない。今の自分のように、ただ押し黙っていただけだ。

言葉を、感情を、泣き声を……悲鳴を。心の奥に押し込んでいた叫びを語らずに、それでも精一杯瞳で訴えていた。訴え続けていたそれを、なんで俺は気づけなかったんだろう。

「……それで？」

込み上げてきたものを堪えて。トランは続きを促した。

気づけなかった……聞けなかった話を、聞こうと思った。今の自分には、そうする事しか出来ない。それ以外、自分はもう、この子に何もしてやれないのだろう。

溢れてくる熱いものを我慢して、平静を努めて。ようやく搾り出した声はしかし掠れてしまっていた。

急かされて、少年はおずおずと話を続ける。

「……探し回ってて」

「うん」

「ゴミ箱でようやく見つけて、父ちゃんを問い詰めたんだ」

「……うん」

「反抗したんだ。はじめて。そしたら」

「……うん」

「……破られちゃった」

少年はいつも、手作りの赤いお守り袋に紐を通したものを首から下げていた。

中には、赤い折り紙一枚。裏には少年に向けて綴られた母の言葉。綺麗で、どこか優しげな印象を抱かせる字だった。

きつと何度も読み返したのだろう。折り紙は擦り切れていて大層汚れていた。所々、何かが滲んだのか、読めない箇所がある。折り目に沿い幾重も貼られた、黄色に変色したセロテープ。お守り袋について尋ねた時、それまで見たことも無いような誇らしげな笑顔を自分に見せて、それから照れ臭そうに、はにかんだ

「本当は、ね？ あの火事の時……。僕も、父ちゃんと一緒に居ようと思ったんだ。……でもね」

「……」

「僕は、お兄ちゃんと違って、弱かった」

「……そんなことはない」

トランがやんわりと否定すると、

「……そうだね」

闇に慣れた視界で、少年の口角が歪に上がる。

「コレがあれば僕も……」

眩いて、ずっと握ったままだった自身の右手を、トランに向けて開く。

「……………」

開かれた小さな掌の上に。トランが探していたオマモリがあった。

この結末が杞憂であればいいと思った。

何度も願った。だが

突き付けられた現実にトランは眩んだ。

「僕もお兄ちゃんみたいに、強くなれたよ」

雲が晴れ、室内に仄かな月光が差し込む。

照らされた、その泣き笑顔は、歪。

「それは、強さじゃない」

トランは静かに首を振った。

「強さじゃないよ」

「……………どうして?」

少年の声に混じった絶望の色に、ハッしてトランは瞳を見開く。

「お兄ちゃんも、僕を怒るの?」

「ちが……………」

「お兄ちゃんも僕が弱いから怒るの? 僕を嫌いになるの?」

「聞いてくれ、そうじゃ……………」

「僕はもう強くなったよ? 今は何も怖くない。だって」

「っ」

「父ちゃんは黒コゲになっちゃったんだからさ」

くすくすと笑いながら少年は右手のオマモリ 薄い布を剥ぐ。

中から出てきたのは紅い石の指輪だった。

細身の造りのソレを、小さな指で弄ぶ。

血のように紅い、ガラス球のような石。紅蓮の赤の色。

「それを……っ」

「……」

出来る限り感情を殺して、トランは少年に語りかけた。

「それを、返してくれ」

「……なんで？」

「危ないんだ。それは」

「勿論知ってるよ。このオマモリ。お願いすると、火を出してくれるんだよね？」

愕然とする。その言葉は、いつかの自分が感じた

「こんな世界、もう要らない。嫌なものはみんな、燃えてしまえばいい。怖いものはなんでも、これが消してくれるんだ」

「……………おまえが嫌なものは」

「なに？」

「おまえが嫌なのは、世界か？ 消したかったのは自分を取り巻く現実か？ だから、それを手に取って……願ったのか？」

「そっだよ」

トランの低い問いに、少年は再び歪な笑みを見せる。

「お兄ちゃんみたいに強くなりたかった。だから、お兄ちゃんのオマモリが欲しかった。お兄ちゃんを強くしてくれるオマモリなら、僕の事解ってくれるって思ってた」

トランは理解した。

この少年は、決して弱くなんかない。

その逆で……どうしようもなく強かったんだ。

「だってお兄ちゃんは僕の事、ちゃんと見てくれるから。だから本当は、お兄ちゃんにはずっと打ち明けたかった」

だから押し黙っていた。強くありたいと願う強い意志は「助けて」なんて他人に請う事は許さずに、

「母ちゃんがいなくなってから、僕、もうずっと要らなかったんだ、こんな寒くて暗い世界。僕に意地悪な、僕の事を好きになってくれない世界なんて……ずっと壊したかった」

自分でなんとかしようと思った。

必死に切り開こうとしていた。

その幼さ故に不器用な強さがきつと、あれを　力を引き寄せてしまった。暴走させてしまった。

トランは、瞳を閉じる。数日間を共にした少年の寂しげな笑顔が浮かんだ。

……強く在る必要なんかなかった。

少年の周りに、頼れる大人は誰一人いなかったのかもしれない。ちゃんとした叱り方で道を指し示してくれる人はいなかったのかも。与えられて当然の温かさも、優しさも側にいてくれなかった。……でもだからこそ少年は、自分で自分を甘やかせばよかつた。

たんだ。

我慢せずに、子供らしくただ、泣いてよかったんだ。

「……違うよな？」

「……………え」

トランがゆつくりと開眼する。強い視線。意志の灯った黒瞳。正面から向けられた少年は受け止めきれずに　その表情に今、初めて焦燥が浮かんだ。

「おまえが嫌なのは、世界でもなくて、父ちゃんでもなくて。……

おまえ自身だろ」

「違う……そんなの……」

少年は、ふるふると首を横に振る。

「違うよ」

強く断言するトラン。繕う為の言葉を遮断された少年の瞳に怯えの色が混じる。それでもトランは突き刺すような視線を決して解かなかった。

「だから、本当は」

「やめて」

俯いて両耳を塞いだまま、少年が一步、二歩と後退していく。小さな体は怯えたように震えていた。それでもトランは、真実を口にした。

「おまえは、自分を壊したかったんだ。……………父ちゃんに好きに

なってもらえない、弱い自身を」

トランの冷徹な声に少年の瞳孔が開く。

瞬間。世界は紅蓮に包まれた。

8

「……………え」

一瞬にして形成された、赤い地獄。

灼熱の空間。炎の爆ぜる音の隙間で、少年の困惑した声がやけにクリアに響く。

「……………どうして？」

石を使って、少年は再び総てを消し去ろうとした。

自分を追い詰めるモノ総て　それは他人でもあり世界でもあり、
自分自身でもある。

紅蓮の石は少年の意思を汲み、呼応するように鳴いた。

父親が黒炭になった時と同じ。右手の中、赤く光る石が「シユオ
オオオオオオオ……………」と鳴くのを見て、少年は瞳を閉じた。

瞳を開けた時、そこに総ては無く、全てが黒炭になっている。今
度こそ、石が己の願いを形にしてくれる事を確信して。

……………だが。

「……………どうして、……………燃えないんだ」

広がる紅蓮の世界。煙炎の漲る空間で、しかし先程と同じように、
黒髪の青年が一人立っている。

生じた熱風に靡くコート。自分を見つめる強い瞳。

その身は一面に広がった炎の海に照らされ、赤く染まっていた。しかし、不規則に我が俣に踊る炎は青年を避けるように流れて、決して襲い掛かるうとはしなかった。青年だけではない。病室内の家具、揺れるカーテン……全てが、燃え盛る炎の中で、そのまま在った。全てを消し去る終わりの赤に支配された世界でしかし、全てのものが消えてくれない。

「なんで……？ あの時と、同じようにしているのに……」

呆然と立ちすくむ少年。

果たして。石は誰の意思を汲み上げたのか。

「もう、やめるんだ」

トランの声が、少年の真白になった頭に降って来た。ビクッと小さな肩を震わす。

「それ以上やると、今度こそ『おまえ』が消えてしまう」

気づけば。トランは少年の目前に立っていた。

大きな、大きな体。

「……………あ」

その表情に険はない。ただ無表情で己を見下ろしているだけだ。だが、公園で会っていた時とは比べ物にならない程の威圧感を、少年は全身に感じた。

敵わない。

頭ではなく、体で漠然とそう感じた。

「おまえが持っているそれはな。俺のオマモリは……禁術封石って言うてさ」

「……きん……じゅつ……ふうせき？」

「そつだ。魔石の中でも特に力が強くて、人にとって危険な石をそつ言う」

「……………」

「禁術封石は……いや、魔石ってのはな？ 天使とか魔族とか、要するに人間じゃない奴。そついうのが死んで消えた後、その力だけが結晶化して出来たものなんだ。だから、本来人間の物じゃない。人間には扱いきれない……とても危ない物なんだ」

「……よく、解らないよ」

「……………そつだな」

苦笑してその場にしゃがむと、トランは少年の頭に手を置いた。それはあの公園での優しい風景を思い起こさせる。あの時も同じように、トランは自分の頭に手を置き、語りかけてきた。

自分を覗き込む、強い意志の灯った……だが、どこか人懐っこい黒い瞳。

徐々に威圧感が消えてゆく。

「天使や魔族なんかと同じように、人にも属性があつて」

「……ぞくせい？」

「そつそつ。それがどうやら、おまえと俺とは一緒らしい」

「一緒？ 僕、お兄ちゃんと一緒なの？」

少年の声に、しつかりと頷いたトラン。たったそれだけのことが、少年はこの上なく誇らしかった。歡喜の表情でトランを見上げる。が、

「……………れ？」

自分を見る、その優しい微笑みが掠れてきた。
段々瞼が下りてきて。
眠る前の一時。
その心地よさ。

「……………おにい、ちゃん」

「なんだ」

「おにいちゃんと一緒ならさ、僕……………強く、なれるかな？」

「……………」

「こんなモノ、なんか、無くったって。お兄ちゃんみたいに、強く、なれるかな……………」

「……………ああ。おまえなら絶対になれるよ。強い男に」

「そっかあ……………」

「そつだ。だからもう……………安心しろ」

トランの言葉に、へへつと無邪気な笑みを零して。少年は、ゆっくりと瞳を閉じた。

「……………そっか……………これでもう父ちゃんに、嫌われないね……………よかった……………」

崩れ落ちた少年の体を、トランがしっかりと受け止める。

同時に炎の海は何事もなかったかのように消滅し、室内に夜の静寂と闇が戻った。

「……………」

静かに。少年の手から転がり落ちた紅蓮の石を拾い上げる。

「……トランちゃん」

声がして、トランはそちらを振り返った。

一体いつからそこに居たのだろう。戸口にクレープが立っていた。長くふわふわした金髪と、細身の美しいシルエットが僅かな月明かりに照らされ浮かんでいる。

彼女の服装と、何より姿が見える事から察するにグレープの体を借りたのだろう。クレープが入ると、グレープの体はクレープそのものに変化してしまう。

自分の呼びかけに、振り返ったトラン。

泣いているのかと、クレープは思っていたのだが、予想に反してその顔は穏やかだった。

意表を突かれて、可憐な赤の瞳は少し見開かれたが、それもすぐに元に戻る。

それ以上に、彼に驚かされた事がある。

「知ってたんだ……ソレが。禁術封石だって事」

トランは、先ず自分に苦笑してみせた。

そのうち表情が消え。徐々に視線を落として、自身の手に戻ってきた石をじっと見つめる。

「……黙ってて、ごめん」

理解して、それでもその人生を歩んできた、トランの葛藤。聞き出したところでクレープには、理解しようとしても決して叶わないだろう。

「……ううん。謝らなくていいの」

少し哀しげな微笑を浮かべてクレープは瞼を伏せた。長い睫毛がルビーにかかる。闇の中でも褪せない、金色の細糸がさらりと揺れた。ややあつて、顔を上げる。

「それよか、さ。連れてきたげたよ。多分要ると思ったから」

いつものように快活に笑いながらクレープがふわりと浮かんだ。

宙をゆつくり進んで病室に入ると、彼女の後を靴音を鳴らせて長身の男がついてきた。

青がかった銀の長い髪。切れ長の青い瞳。しなやかに筋肉の付いた。悔しい位に、非の打ち所の無い外見。シャツにジーンズを着込んだラフな服装だったが、その姿は夜の闇に映え 男でも見とれてしまう程端麗だ。

「リチウム」

「……まあたドンくせえ事やってんのな。トラン」

手にしていたレーダーをジーンズのポケットにしまいながら、心底面倒臭気な様子でボヤいた。

「……………」

トランはチラツとクレープを見遣る。どうやらその赤い瞳に、全てを見抜かれていたみたいだ。

自分を見つめる穏やかな表情の彼女に苦笑してみせた後、トランは腕の中の小さな体をベットに寝かせた。

「さすがに消耗してるな。さっきまで立ってくっちゃべってたのが

不思議な位だ。こんなナリして二日も続けて禁術封石発動させたつてか」

「……発動時間が短かったからだろう。侵食は……そんなに進んでないと思うんだが」

「例え短時間でも、持つてるだけでもっさり吸い取られんじゃねえか。禁術封石つてのは。しかもおまえの石コ口は『炎帝』だろうがよ。んな大層な代物持ち歩いてて、自覚ねえのか？」

「……悪かったな。今初めてコレの名前知った」
「阿呆が」

靴音を響かせて、リチウムはベットに歩み寄る。途中、トランの前を横切ろうとした所で、その足は、

「……んで？ どこまで消せばいいんだ？」

ピタリと止まった。

横顔のまま、厳しい青がトランを見ている。

トランはほとんど無意識に少年の顔を見た。深く瞼を閉ざしたその顔は、しかし優しい表情をしていた。

「……ごめんな。勝手に触る」

瞳を閉じて独り言のように呟くと、意を決してトランはリチウムを振り返った。

リチウムの左手から、闇が漏れる。

それは微量ながら、今まで生きてきて触れたどの闇よりも深く。底なしに暗い。

闇を従えた左手が、今静かに。

少年の額に触れた。

ある晴れた日の午後。トランはニタバーニの車に半ば強制的に乗せられていた。

自分が運転するからと幾度行き先を訊いてもニタバーニは教えようとしなかった。浅黒くごつごつした長方形の顔にニヒルな笑みを浮かべたままハンドルを手に正面を見据えている。

ニタバーニは、こうと決めてしまつたら最後、考えを曲げない。彼が「教えない」と決めてしまったのなら絶対に答えてはくれないだろう。何度目かの質問の後、仕方なくトランは助手席のシートに凭れた。彼の意味はきつと鉄をも砕く。

『炎帝』の禁術封石を手にしたその日、ニタバーニに助けってもらつてから。トランは可能な限り彼の後を付いて廻つた。だから今の刑事としての自分が在る。

彼の事はよく知っているつもりだ。彼の亡くなった奥さんにだって、負けない。

トランが出世を拒むのは、禁術封石を所持しているからというものもあるが……本当のところ、ニタバーニの元を離れたくないから、という理由の方がウエイトを占めているかもしれない。

養父の元で働く事よりも。自分にとっては、如何なる事より誇らしい。

(……悪い。俺、そんなに強くないみたいだ)

自身を親離れ出来ない子供のよう感じて、トランは心の中でいつかの少年に謝つた。

「着いたぞ」

低い声を耳にして、トランは前方を見た。

「……………街を出て、随分南に来たと思ったら……………」

フロントガラス越しに飛び込んだきた青と緑の世界に思わず溜息が漏れる。

晴天の下、右手には生い茂る木々が、そして左手には太陽の光を受けて輝く穏やかな海が見える。

寒気はまだ襲来していないのか、強い日差しが差し込む風景は随分温かそうに映った。

「海は久しぶりか」

「実際に見るのは。警中に入る為にプリムスに入国した時以来だから 六年ぶりですかね。最近は忙しくてそれどころじゃあ……………つて、ニタさん？ こんな所に一体何の用が……………」

「さてな。ほら。ぼさっとしてると置いていくぞートラン」

トランの質問には答えずにさっさと車から降りたニタバーニはさっさと森の奥へと入っていく。

……………これはニタさん、遊んでいるな？

トランも車を出ようとして、自分がまだシートベルトを外していない事に気づき少しだけ慌てた。

ドアを開けると、木々の大音声がトランを迎えた。広がる世界に感嘆の声を漏らす。背伸びをして体を解した後、トランは冷たい空気を思い切り吸い込んだ。海から吹く肌寒い風、体に響く自然がどんなにか心地よい。

二、三度深呼吸を繰り返してから、遠ざかっていく足音を振り返る。

所々色づき始めた緑の風景が広がっていた。どこか懐かしい感じ

のする小道をニタバニーは進んでいく。既に小さくなっていた背広姿を、慌ててトランは追いかけた。

落ち葉の道を早足でざくざくと踏む。容赦なく吹き付ける海風に着込んだコート裾がばたばたとためく。すぐに追いついたその背中はこちらを振り返らない。

「……………ニタさん、ここは」

「訊くより見た方が早いだろ」

その声は、やはりどこか楽しげだ。

不審に思い首を傾げてから……………数分後。

どこからか、無邪気な子供の声が聞こえてきた。

進むにつれ、徐々に大きくなる。

やがて木々が開け。正面に、胸の高さまである金網の柵が現れた。柵の前に立ったニタバニーが顎を動かしてトランを促す。見てみる。僅かに見せた横顔がトランに告げていた。疑問符を浮かべたまま、トランはニタバニーの横に並ぶ。

柵に囲まれたそこは、小さな運動場だった。

本当に小さい。奥に小さな教会のような建物が見えるが、自分の足ならば……………この運動場を十歩で突っ切って辿り着く事が出来るだろう。

まるであの公園のようだな。トランは密かにいつかの風景を思い出していた。

小さな運動場の隅にカラフルな遊具が設置してあった。大小の鉄棒。滑り台。ブランコ……………。

……………ブランコに、子供達が集まっている。

楽しげな笑い声に混じって、キィ、キィと。ブランコを勢い良く漕いでいるのは

「……………あ」

「記憶が無くなっているのが解った時は、どうなる事かと思っただが、それが幸いだっただのかもしれない。あの少年が受けた痛みや傷は、記憶を探る石を用いても見つからなかった。あの火事の原因が少年であったという証拠もどこにもない。」

「医者は強いシヨックを受けたからだろうと言っていたが、母親の記憶だけが残っている……なんて、なんとも都合の良いすぎる結末には聊か具合悪くもさせられるがなあ」

「……………」

トランは顰めた顔で僅かにニタバーニを見上げた。この人は一体どこまで自分を見抜いているんだろう。

まあ、訊いたって答えてはくれないだろう。沸いた疑問はそのまま風に吹かす事にする。

「……………こんな所に居たんですね」

「『できれば街から遠く離れた孤児院に』。俺にそう頼んだのはおまえだろう」

「そうでした。でも。まさかまた会えるとは」

自分に会ったら、折角消えた記憶が蘇ってしまうかもしれない。リチウムはその心配は要らないと言いつつだが、事が事。用心を兼ねてトランはそれ以後少年に会わなかった。

少年は、あの頃とは全くの別人に見えた。印象がまるで違うからだろう。仲間にも困まれ、浮かべているその笑顔に影は少しも感じられない。

「なによりも、もう独りじゃない。」

「会っていくか？」

ニタバーニが初めてこちらを振り返ったが、静かに首を振った。

「戻りましょう、ニタさん。仕事が残ってます」

そう。

自分はすっかり働いて、少年の借りをリチウムに返さねばならぬい。

と、というか。早く返してしまわねば、いつまでもクドクドグチグチ言われ続ける事になる。

ただでさえ、居候の身。これ以上肩身の狭い思いはごめんだ。

ニタバーニはゲンナリとした表情を見せた。

「刹那のバカンスだったなあ……」

溜息混じりにそう呟くと、大袈裟に肩を竦め、来た道を戻ってゆく。

その様子に笑い、自分も後に続く 前に、もう一度。ブランコを振り返った。

子供の群れの中、懐かしい笑い声が聞こえてくる。

「僕？ そうだな僕はあ……赤い色が好きかな？ だって、赤は強いんだ！ 誰にも負けないよ！」

e n d .

序幕

創世の神は大きな石だと言われている。

この世、万物の力は石から成る。故に、石の存在なくして文明の発展はなかったとされている。

フロース
世界には大きく分けて三つの種族が存在している。

先ず、人間。

それから人型よりも色素が薄く、背に羽が生えている種族を天使人型をしていない種族を魔族と呼んだ。

天使・魔族は、人間にはない魔力というものを持っていた。

彼らは絶命するとその肉体も消滅してしまうが、彼等の体内に備わっていた魔力は、消滅を避ける為か、凝縮、固体化して消えゆく^{から}肉体を離脱する。この魔力の結晶を総称して”石”と呼んでいる。

即ち石とは、生前の彼らの魔力 否。存在そのものである。

石にはそれぞれ属性があり、人によって使いこなせる類が異なる。しかし加工、製品化された石はその限りではない。

石を加工して出来た物を総称して石化製品と言う。

石化製品には、誰にでも扱う事のできるようあらゆる細工が施されており、一般家庭の機器を誰もが難なく使う事ができるのはそういう理由である。

だが、『禁術封石』と定められる石は、如何なる細工を施そうと決して人間には取り扱う事は出来ないとされている。

その理由の一つに、人の身に余る力を有しているため。

一つに、「崩壊」に直結する類の魔力 魔術を秘めた石が多いため。

一つに……禁術封石を持つことは、人ではないもの 魔人化へ

の路を歩むということに等しい。

尤も人は、初めから禁術封石を所持することを許されてはいなかった。

太古。

創世の神である大きな石は、大きく分けて三種の力を秘めていた。強大な力を持つその巨石を巡り、いつ頃からか、種族間に大きな争いが起こる。

どの種族が戦火を切ったかは定かではない。

魔族は、祖先の結晶　魔石を集める為に、その荒い気性の赴くままに他種族を襲った。

人は、己の能力　存在を誇示しようと、石を使って他種族に挑んだ。

天使は、祖先の結晶　天石を集めると共に、その高き誇りにかけて他種族を従わせようとした。

長い長い戦い。誰もが、世界が終末を迎えるその瞬間まで続くものと考えていた果て無き争いを、天使、人間、魔族は、同盟を結ぶ事で終結させた。

天使は、石を管理する。

天石を総て保管し終えていた為、魔石を集める事を義務付けられた。魔石の中でも力の強い石は総て魔族へ返し、力の弱い石は人間へ分け与える事。それ以外、人、魔族に干渉しない。

人間は、魔石を発見後天使へ渡す。

その報酬として、天使から与えられた力の弱い石のみ扱う事を許された。特に力の強い石は「禁術封石」とし、所持する事を禁じられた。

魔族は、石の管理体制を整える事を条件に、人、天使に干渉しな

い事を約束させられた。

そして同盟を成立させる為、世界を生んだ巨石は三つに分離する。それぞれ異なる力を司った三つの巨石は、世界に散らばると各々空間を創り、天使、人間、魔族、それぞれの種族を各空間に移した。

以後、平穏な時代が訪れる。

天使と人間は魔石収集の為、協力体制をとる事になり、互いの居住空間を自由に行き来出来るゲートを設置した。

二つの種族は、魔石探索本部として、人間の持つ警察機関を選定する。以後、警察機関は、天使と、一部の人間が統率、運営するようになった。

魔族は、他種族との接触を絶ち、住処としている空間のみで暮らすようになった。

創世の神であった三つの巨石は、世界に平和が訪れた事を見届けた後、永き眠りについた。しかし、その力は決して衰えず、それぞれの種族に繁栄を齎した。

一つの世界に三つの石神。三つの空間。それで総てが治まり、平穏は永久に続くかと思われた。

だがある時。ふとした弾みで、巨石の内、一つが目覚める。

それを発端として、種族間で結ばれた同盟 保たれていた平和は徐々に綻びはじめた。

いつしか。天使は魔石総てを手中に治めようとし、

人は禁術封石を収集し出して、

魔族は魔石を奪還しようとし、個々で活動を開始していた。

今は、大昔の争いが再び蘇る……ほんの一步手前の時代。

これは、混沌の世を走り回る探求者たちの物語である。

前編

1

夜の深蒼。木々の濃陰。満月の下、静かな森を銀を帯びた光が一閃する。

ヒュンと風を切る音。遅れて、草木がざわめく声。

光かと思われたそれは、月明かりに反射する銀の長い糸であった。銀は幻のように流れ、一瞬で視界から消えてしまう。

駆けるそのスピードは、人の目に辛うじて残像を残す程度。

風のように流れるそれは、天使か。はたまた、魔族か。

「……………」

木々を抜けたその身を、淡い月光が照らした。

それは、人の姿をしていた。

天使のように純白の翼を所持している訳でも、魔族のように人型を凌駕する身体能力を秘めた異形な肉体を持つている訳でもない。

はためく深紅のマントに、白いシャツ。濃紺のジーンズ。たくさんの金具の付いたブーツという一風変わった身なりをした男は、長い青がかった銀の髪を夜風に靡かせ、すらっと伸びた長い手足を懸命に前へ前へと突き動かしている。

闇を灯す強い青瞳。月明かりにやけに映えるその姿は、紛れもなく人間だった。

しかし、姿は一瞬で再び森然に入り、見えなくなってしまう。

「……………」

木々を掻き分け、一直線に突き進む男　　リチウムの表情には、

僅かに焦りの色が滲んでいた。

事は三日前。リチウムの相棒を務める小さな少女　リタル・ヤードの姿が消えた。

深夜、仕事の時間になってもホームに戻らず、連絡一つ寄こさない。

ストーンハンター・フォルツェンドとして彼女とコンビを組んで五年間、初めての事だった。

小学生であるリタルはともかく、ありとあらゆる場所に様々な魔石が転がっているこの世界にストーンハンターを生業としている者は決して少なくない。

正規のストーンハンターは、ストーンハンターギルドに登録した後、他の登録者を募ってパーティを組む。実際にハントに赴きながら経験と知識を蓄えていく。

一方、リチウムとリタルはギルドには登録していない野良ハンターと呼ばれる存在だ。理由は簡単で、そもそもリチウムの師が野良であった事、それに何よりリチウムはギルドに入る程収入に困っていないかったからだ。

ストーンハンターギルド　SHGは世界各国に点々と設置されている。

ハンターはそこで、各地の魔石情報を仕入れたり、講師や他ハンターから技能を学んだりもする。

他にもSHGには、様々な企業スポンサーから出された依頼書等も掲示されており、ハンターはその中から、自身の技量、賞金等、条件に見合ったものを選び競い合ってハント、報酬を得ている。

一方、野良ハンターの収入源といえば、大企業に雇われた専属ハンターやら、リチウムのように天使やコレクターに密売している者

まで様々だ。

リチウム達フォルツェンド一味の活動は深夜で、リタルの造った魔石探知機^{リーダー}で目星を付けた禁術封石を得るべく夜な夜な街を飛び回っていた。

最近では目ぼしい禁術封石は殆どと言ってもよい程、裕福なストーンコレクターが収集しており、ハンター間でも、貴重な魔石を手に入れたければコレクターの屋敷を漁った方が手っ取り早いと言われている。

実際リーダーの反応も街中ばかりで、リチウム達はコレクターの豪勢な家に侵入しては貴重な魔石を片っ端から強奪している。故に、リチウムはハンターでありながら「盗賊」と呼ばれ、やはり毎晩、警察に追い掛け回されている。

スタートは決まって深夜零時。その十分前には二人とも準備を済ませてリビングに集合する。これはコンビを組む上で最も重要な決り事であり、五年間一度も欠かした事のない 最早日課とも呼べる鉄則だった。普段怠情なりチウムですら破った事はない位だ。

故に、深夜にリタルの行方がしれないこの状況は、非常事態とも呼べた。

リチウムはその夜予定していた仕事を取りやめ、彼女を捜す事にした。

ブツブツばやきながらも、リーダーでリタルの所持している二つの禁術封石 『転位』と『魔眼』の石の反応を捜す。

しかし、探知しない。

何度試してもどれ程範囲を広げてもその反応は現れなかった。

これは、いよいよおかしかった。何か事件に巻き込まれてしまったのか。

否。たとえどんな事件に巻き込まれようと、『転位』の石を持つ彼女が逃げられない訳がないのだ。

二日前。訳あって自分の元に居候している黒髪の童顔刑事、トラン・クイ口の姿もまた消えた。

捜査中、忽然と消えてしまったという連絡が、彼の現所在地であるリチウムのホームに入った。

彼の所持する『炎帝』の石の反応も、またない。

状況からして、結論は一つだった。

二人は同じ場所に居る。

同じ何かに巻き込まれている。

そうして、今夜。これまた訳あって居候している、肩までの青い髪を持つ清楚可憐な破壊魔、グレイプ・コンセプトの姿も見当たらない。

事態に気づいたりリチウムは、たった一人、夜の森を疾走していた。

街の明かりは既に彼方に消えていた。日中と比べると随分低い気温も火照った体には丁度よく、森の奥から吹き付ける刺すように冷たい風が絶妙に心地よい。

普段から人並み外れた身軽さを誇る彼だが、それでももう数時間は走りづめの状態だった。汗と疲労が体を伝う。

人気がない深い森の中で己の息遣いは煩く響く。加えて、草木の擦れる大音量に、静寂を好んで纏う夜の森は余程迷惑していることだろう。

走りながら時折、リチウムの視点は手にしている掌サイズのレーダーに移った。

普段彼らが使用している魔石探知機とは異なる形状をしている。

小さなモニターには、規則的に響く機械音と同じリズムで点滅する光点が一つあった。

リチウムが移動すると、光点の位置も動く。そうやって光点は徐々に十字の交わる中心に近づきつつあった。

闇の支配する洞穴で、無数に張り巡らされた糸の僅かな発光だけが照明として存在している。

「……………ぶっ殺す」

金の長い髪の女、クレープは吐き捨てるように呟いた。

グレイプと酷似した顔立ちに、彼女が普段から着用している学園指定の董色の薄手のコートを纏っている。淡黄色のチューブトップ、短めのキュロットとカジジュアルにまとめているが、その上から細い糸が幾重にも巻きついて華奢な身体を締めつけていた。

何故、クレープがグレイプの格好をしているのか。

否、格好を真似ている訳ではない。その肉体は間違いなくグレイプのものだ。

クレープは本来幽体で存在し、肉体を持たない。故に彼女の姿が視えるのは、リタルが持つ『魔眼』と呼ばれる禁術封石の魔力の有効範囲に居る時だけである。例外として存在するのがグレイプだ。

グレイプは『魔眼』が無くてもクレープの姿を見ることが出来、肉体を持たないクレープにその身を貸し与える事が出来る唯一の人だった。

グレイプの中にクレープが入ると、その体はクレープの姿に変化してしまう。それが今の状態である。

不可思議な彼女達の関係を疑問に思う一同だったが、当の本人たるグレイプまで何故だろうと首をかしげ、クレープはというとグレイプと会うまでの記憶が消えているなどと言い張る始末で、謎は未だ解明されぬまま。今ではリタル以外、そういうものなのかと納得してしまっている。

外見は双子のような彼女たちだが、その性格は見事なまでに相反

しており、グレープがおつとりで少々（？）天然が入っているのに
対し、クレープは勝気で姉御肌。言葉遣いも少々乱暴ではある

そんなクレープの赤い瞳に今、強い怒りの色が灯った。

筒闇の洞穴の最奥はちよつとした広さのあるドーム状　半球型
になっていた。

高さのある丸い天井。学園の小グラウンド並の広さ……とはいかないまでも、狭い街中の至る所に設けられた中規模の駐車場の広さ
はありそうか。奥の壁一面に形成された大きな蜘蛛の巣の中央に磔
にされたクレープと、リタルの姿がある。

クレープが発した怒りの直後、彼女達の目前で今、初めて影が揺
らいた。

暗闇の向こうから、背の低い物体が妙な動きで接近してくる。

「こんな状況でまた、随分と威勢のいい人間が居たものだ」

しわがれ声が響くと、やがて地べたに這いつくばったその姿が糸
の淡光に照らされた。

「……『魔眼』で識ってはいたけれど。あんまり実物にお目にかか
りたくなかったわ」

白いミニスカートに黒のレギンス。大きなエメラルドの瞳は不快
の色を露にし、幼顔を露骨に顰めた少女　リタルが、堪らず呻い
た。

八本足を所持し、ぷっくりと膨れた腹。地にへばり付くような体
勢で彼女達の前に現れたそれは、まさしく蜘蛛だった。

ただし、全長二メートルはあるうか。頭部には通常見る蜘蛛のソ
レではなく、人の頭がついている。

その表情は能面のような無。むき出しになっている眼球の白眼は

血のように真っ赤に染まっていた。

「……つい今しがた、ようやくそのオスの記憶から目標を確認する事が出来た」

発声しても、表情筋は微動だにしない。顔面ではからくり人形のような口と、血の双眼だけが活動していた。他の部位に代わり、パクパクギョロギョロと忙しなく動く。

「最早おまえたちには用がないのだが、さて……」

大蜘蛛は、品定めをするようにクレープ達を見回した。

「誰から食らってやるうか」

「ナニたわけたコトぬかしてんのよ」

人外の姿に怯む様子もなく、変わらぬ調子でクレープがジト目を向けた。

「アンタみたいな人面蜘蛛に食わせてやる体なんぞ無い。アンタよ死ぬのは」

「……クレープ」

赤い瞳を細めて見下すように言い放ったクレープに、今度はリタルがジト目をくれてやる番だった。

また不必要に敵を挑発して……とでも言いたげな様子だ。

これまでも、クレープの直情的な物言いが原因で起きたトラブルは数知れず、その度にリタルとグレープ、トランは事後処理に追われるハメになった。

まあ、トラブルメーカーは彼女の他にもいるのだが……今頃、ど

こで何をしていることやら。

銀髪の男を思い浮かべようとした頭は、しかし次の瞬間、響いた音にフリーズした。

「……………くく……………はははははははははは！」

瞼が動かないのかそもそも機能していないのか、瞬き一つすることもない。飛び出た目の玉の動きと、上下に開閉する口からは感情が読み取りにくい。したがって蜘蛛の感情は総て声色に乗って届く。

「人間風情が我に向かってよく吼えた」

リタルの予想を越えて、蜘蛛のそれは愉悦に満ちていた。

「無力なおまえ達を使う、我等の仲間の結晶。その力すら私の糸に吸われて、もはや成す術もなく絶望している頃合だと思っていたのだが……………。非力な人間が如何なる手段で我に歯向かおうと言うのか……………」

だが、その愉楽の色を静かな言葉が無遠慮に遮った。

「アイニク。アタシはんな石コロなんて持ち合わせてないんだけど……………なに？」

大蜘蛛は、自身の聴力を疑った。

力こそ総て。強さこそ何物にも替え難い。言つなれば魔族の資産である。魔族の位は、持っている能力と、強弱によって決まるのだ。

その力を欠片すら持たない憐れな最弱の種族が、勝ち目の無い相手に向かって意見を述べているというのか。

「聞けば、アンタ達化け物や空飛んでる白っぽいので、人間と違って結晶とやらを使えないンデシヨ？ 己の持つてる能力しか使えないのよね？」

「……なにが言いたい？」

「『非力な人間』だなんて、どのクチがホザいたのかしら。有限の力のアンタが、無限の力を扱う人間サマ、ナメてンじゃないわよ」

ギンと大蜘蛛を睨みつけるクレープ。

「……く……っ」

射貫くような赤に、大蜘蛛は僅かに身じろぐ。

(なんだ……恐れを抱いたというのか……？ 我が、人間如きに？)

恐れを抱くのは、憐れな存在である人間の方だ。

自分という絶望の象徴の前に、押しつぶされて泣き叫ぶ。命を請う。それは想像などではない。大蜘蛛の中では絶対な現実だった。だというのに。

赤の瞳に射られて、一瞬でも凍り付いてしまった。

これは……とんだ失態だ。なんであるう己の反応にこそ嘆いた大蜘蛛は悔しそうな声色を漏らす。

「……おまえは最後まで生かし、仲間の死に様を見せつけ存分に絶望に浸らせてから食らおうと思っていたのだが」

八本の屈折した足が、かさこそとクレープに向かって動き出した。

「見かけ通り悪趣味な脳ミソしてるのね」

「って、ちよつとクレープ！」

小声にそちらを振り返れば、切羽詰った顔のリタルが自分を見ていた。

「さつきからヤケに大口叩いてるけど勝算でもあるの？　ンなもんあるならさつさと……」

「ないわよ。ンなもん」

「ったくどうしてあんたはもおおおおお！！」

地団駄を踏みたそうにリタルの体がもがくが、強靱な糸はそれを許さず、

「……って、アンタ。ますます絡まっちゃってどうすんのよ？」

平然と、それを眺めるクレープ。その視線と言葉にはたつぷりと皮肉が込められている。

「うっう……っ　だつてあんたが」

「誰カサンの台詞だったわね。ヒトのせいになんないって」

ピシヤリと放たれたクレープの正論に口ごもるリタル。大人しくなるのを横目で見届けてから、

「ただアタシは……本気でムカついただけよ」

静かに言い放つと、クレープは目前に迫った大蜘蛛に視線を落とした。

「蜘蛛がどうやって獲物を食べるか、知っているか」

二つの血眼がクレープの顔を覗き込む。大蜘蛛の声からはもはや、先程の余裕は欠片も感じられない。

「さあ？ 悪いけど、姿形がそんだけキモチワルイ生物になんてアタシは特に興味もなし。知りたくもないわ」

ジト目で受け流し、変わらず平然と答えるクレープ。

「……そうか。無知故の愚言か」

隣へ放たれる殺気に、リタルが顔を顰める。

「その身を持って後悔しろ」

大蜘蛛が高く跳躍した。

「……………クレープ！」

リタルの目の前で、クレープの細い体はあっという間に黒に覆われた。

「……………！」

大蜘蛛の舌がクレープの首筋をナメクジのように這う。耳の裏から肩口へ。嫌悪感からクレープは僅かにくぐもった声を漏らした。瞬間、大蜘蛛は大きく開口すると、剥き出しの凶悪な牙を白い肩に突き立てた。

「……………あ……………！」

細い肢体が、蜘蛛の足と糸の隙間で二、三度大きく痙攣する。

「……………」

いつだって憎たらしい程強気な彼女が漏らした……今まで耳にした事もない苦悶の声。その衝撃、哀しさ、痛み。そして失くしてしまうかもしれないという恐怖。一瞬の内に様々な感情に襲われ言葉を失くしたリタルは瞬きもせず、青ざめた顔でその光景を見ていた。

やがて、大蜘蛛の能面が僅かに離れた。

口の端から、真つ赤な血が滴り落ちる。

誰の血かは一目瞭然だ。

「……………あんた……………！ 蜘蛛の分際で何かましてくれてんのよ！」

堪らず、リタルが険しい表情でがなり立てるが、

「……………だい、じよぶ」

普段の様子からは想像もつかない程の弱々しい声に制され 我
に返る。

細かい毛の生えた蜘蛛の足。その隙間から見える、無理に作られたクレープの表情はしかし、言葉程の説得力を持ち合わせてはいない。

「クレープ……………！」

……………冷静にならなくちゃ。

リタルは必死に自分に言い聞かせた。

事態は最悪だ。反撃も逃走の手立てもない。

だからといって取り乱しては、どこに転がっているかもしれない打開のチャンスを見逃してしまう。

たとえそれがどれ程小さかろうが、僅かだろうが、一ミリだって見落とすことは許されない。

……許さない。

「あなた……っ クレープに何したの」

リタルは目前にある巨大な黒い物体をにらみつけた。

屈折した足が順を追って動き、何の感情も持ち合わせていない血眼が、少女の姿を移す。

「我の糸には、数種類ある」

血に濡れたからくり人形の口を開閉させた。

「今、おまえたちの体を縛っているのは捕獲用の糸だ。噴出時に、私の体内で生成された毒をかけてある」

「毒……？」

吐き捨てるように呟けば、目を細くするリタル。

「……あたし、かれこれ二、三日位ずっとこの状態なんだけど。感覚がある程度鈍りはしても、致死率は低いみたいね。その毒とやらは」

「身体機能が衰える程度の毒だ。尤も直接与えてやれば、この女のように麻痺位はするのだろうが」

「……っ」

リタルの反応を受けて、再び蜘蛛の言葉に愉楽が戻る。

「我等はこうやって獲物の動きを封じ、さらに獲物の体内に消化液を流し込んで、中身を溶かしてからそれを吸う」

「……………」

「どろどろに溶かしてな。それが我等流の食事よ」

「……………悪趣味ね」

両手拳を握り締め、少女は真っ向からその存在を否定した。

「なんとも言う方がいい。この女を食した後はおまえの番だ。存分に戦くがい……………」

「……………言ったデシヨ」

腹の下にいる、小さな人間の声が僅かに聞こえて、大蜘蛛は再びソレを視界に入れた。

こんな状況でも少女の赤は、先程と少しも変わらぬ眼光を秘めていた。

自分を睨んでいる。

「……………」

だが、それだけだ。

女はさつき、自分は石　力を持っていない、と言った。何の脅威もない。たとえ力を所持していた所で、魔力を吸い取る糸でぐるぐるとその体を覆っているのだ。自分の位置は揺るがない。……………しかし。

「……………おのの……………く、のは、アンタよ」

先程から。なんなのだろう。
この威圧感は。

「はったりを……!」

振り払うように声を上げ、大蜘蛛は、再びクレープへと迫る。

「……………」

迫る死の匂い。先程よりも濃厚な、回避する術のないそれを、しかしクレープは一瞬たりとも目を背けることなく睨み続けていた。鋭利な牙が再び、細い首に突き刺さる。その瞬間。

「クレープ!」

よく通る、青年の声が響いた。

3

「クレープ!」

声が、脳裏に届く、その時。

クレープの赤い瞳が、見開かれる。

刹那。地響き。否、轟音が一帯を揺るがした。

「な、なに……!?!」

声を上げた大蜘蛛が変化を見定めようと辺りを見渡す……までもなく。ソレは、すぐに捉えられた。

膨大な魔力。瞬間的に爆ぜ、生まれ出た炎柱^{ひばしゅう}。

「……………ばかな」

リタルの横　　一番左に磔にしておいた男が、既に起きている事は知っていた。

だがそれだけだ。起きていても、男には何も出来ない。

男の持つ石は確か『炎帝』と言った。

『炎帝』の名は火を司る神を指している。それがどの魔族を言っているのか、どのような存在なのか、大蜘蛛は知らない。だが、石に宿る魔力の化け物っぷりは手に取らずとも感じられた。

自分　大蜘蛛を、百並べた位じゃ到底足りない。千でも、足りるかどうか。考えるだけで感覚が麻痺してしまいそうな、想像を超えた強大な力を赤い石は秘めていた。

しかし、妙な話ではある。これほどの炎の魔力を持つ存在がいたのなら、高位魔族の名に挙がっていてもおかしくはないはずだ。強さで位が決まる魔界において、魔族の名は上位にある程轟く。高位魔族と言えば、識らぬ者などいない程に存在が知れ渡るはずなのが……。

ひよつとすると、男の持つ赤い石は魔石ではないのかもしれない。天石ではないだろうか。

しかし天石は全て、天使の領域　天界に保管されたと聞く。何故人間風情が、そのような貴重な石を持っているのか。その辺りの詳細を含んだ男の記憶を覗いていない為、大蜘蛛には謎のままであったが。

だからこそ、特に男には多量の糸を用いた。

石が如何なる大魔力を秘めていようと、その力を操るのは天使よりも魔族である自分よりも、あらゆる面ではるかに劣る、人間である。

天使にすら劣る脆弱な人間しよやくが媒介である限り、この糸が破られる事は決してない。人間の持つ潜在能力など、たかが知れている。

それで、問題はなかった。……ないはずだった。

だが、全く予期していなかった事態が今、目の前で起こっている。そこに、大きな炎塊があった。

燃え盛る炎は、その身に纏わりついていた総ての柵を焼き尽くす。その激しさに、どんな存在でも思わず後退りしてしまう……それ程の絶大な怒りを感じた。

古びたロングコートを靡かせ、濃厚な赤を纏う青年が今、地に降り立った。

男の足を軸にして、一帯に渦巻く火炎。

燃え盛る炎を映した黒瞳が、今、大蜘蛛を捉える。

「……人間の操る魔力が、我の魔力を上回っただと……？」

尋常じゃない姿を正面にして、ふと浮かんだ嫌な考えを、大蜘蛛は言い知れぬ恐怖に押され、そのまま口にした。

「……まさか。魔人化したか……!？」

この世界には、三種類の種族が存在している。

天使。人間。魔族。しかし、どの種族にも属さない存在がいる。

かつて人間であったものが、人でなくなる時。世界はその存在を魔人と認めた。

人は石を己の身に入れ、その精神力で制御している。

結晶化した魔力を行使するには、魔族や天使がそうあるように、体内を魔力で満たす必要がある。体に魔力を注ぎ血液のように循環させる事で初めて、魔力を持たない人間は力を得、扱う事を許される。

しかし人間の身にとって魔力は、異物以外の何物でもない。

使えば使うほど魔力は肉体を侵食する。

魔人化とは、その身総てを石に侵食された人間　魔力に肉体を

乗っ取られた状態を言う。

人格は崩壊。身体は魔力を生成する為に、結晶化する前の存在と同等の肉体に作り変えられる。

魔力を発動させるだけの器は、出でた時点で生まれたて同然の状態にある為、本能のままに破壊に尽くす。

人間だった頃の制限や、足かせも無い。それは最早、人間とは呼べない。

故に、魔人こそ、世界の災厄。

天使は、それを未然に防ぐ為、禁術封石の一種である天石を完全に手中に収めたという訳なのだが……、

「……仲間に、手を出すな」

ソレが初めに発したのは、底冷えのする程、怒りの籠った低音だった。

……目の前の男は、未だ人間だ。

だが、大蜘蛛の糸を超える魔力を駆使した事は事実であり、現在も、人間の身体の許容応力 扱い得る力の範囲をはるかに超えた魔力、膨大な量の炎が彼の身を覆っている。

黒い髪は炎に照らされて赤く染まり、黒い瞳は炎のような強い意志を灯し、炎は、その姿を讃えるように男の周りで踊る。

人の身で、あれだけの魔力を操っているのに、一体何故、侵食されないのか。何故、意思を保ち続けられるのか。

普通に考えて、男は有り得ない存在だった。

炎の象徴。その姿。その井出達はまるで、『炎帝』そのものではないか。

「……何故」

「……何故も、ヘツタクレもない」

聞こえてきた小さな声に目を向けて、今度こそ大蜘蛛は目を見張った。

クレープの体が、淡い金色の光を放っている。

「……散々人が忠告してやったのに。それでも油断したアンタが悪いのよ」

「な……っ」

在り得ない。

困惑を隠せずに、大蜘蛛はたじろぎ、金色の体を手放し……そうなるのを、辛うじて堪えた。

大蜘蛛の魔力 能力である『糸』は、他の魔力を吸い取る事でさらに強靱なものへと進化する性質を持つ。

故に、糸に捕らわれた者がなんだかの魔力を発動させても、大蜘蛛の魔力量を超えない限り、魔力は糸に吸われ発動不可能となってしまう。

しかし、彼女はどうか。

彼女自身に発光以外の変化はない。彼女の発光が、魔力によるものなのかも判らない。だが今、炎帝を所持している男の魔力は以前に比べ、明らかに増大している。操る炎は、彼女の金色の光に呼応しているようにも見える。

男の操る力が桁違いなのは……彼女の仕業か？

先程から感じていた 彼女の持つ正体不明の威圧感はコレだったのか？

しかし、他者の魔力を増幅させる そんな能力は、聞いたことがない。

「貴様の仕業か……っ 一体何者」

「んなもん関係あるか……っ」

麻痺が効いているのか、クレープは大粒の汗をかき、辛そうに顔を顰めている。それでも赤い眼光は真つ直ぐに大蜘蛛を射抜き続ける。

「記憶” ってのはヒトの財産なのよ。如何なる存在であろうと、それを踏み荒らすような…… 真似をしてはいけない。許されない。…… 思い出と呼ばれるそれは、ヒトにとっては大事な、大切な、かけがえのないモノなのだから」

「…… クレープ？」

クレープの口調が一瞬変わって聞こえた。僅かに生じた違和感に、リタルが首を傾げる。だが、それは一瞬の事だった。

「 そんな当たり前のコトも解らない程無知だから、ここまで散々好き勝手やらかしてくれてたんでしょケド。…… ちよつとオイタが過ぎたようね。リタルはともかく、トランちゃんに手を出した。万死に値する行為だわ」

「おい」

すぐ隣から入る真顔のツッコミに、しかしクレープは完全にシカトを決め込む。

「 いい加減…… アタシの事よか、自分の身を心配した方がいいわよ」

その言葉に、大蜘蛛はようやく迫る灼熱を感知した。

炎を身に纏った青年 トランが、真つ直ぐこちらにやってくる。

その炎は業火。総てを焼き尽くさんと、なおも広がる。

絶対的な存在が無邪気に踊るその様は、生ある者が持つ生への執着心を刹那に喪失させる。狭い洞穴を占める赤は、地獄にあるソレと等しい。

「く、来るな！ こいつらがどうなっても……」

大蜘蛛のしゃがれ声が洞穴に響くと、爆熱を背負ったトランが足を止めた。ゆっくりと真つ直ぐに左腕を振り上げる。瞬間、トランは死刑執行人のように無慈悲に業火を揮った。

「くそ……っ」

迫る炎に駆り立てられるように高く、屈辱に舌打ちした黒い躰が跳躍した。

巨大な躰に見合わぬ身軽さに、思わず一同は息を呑む。

張り付いた壁に再びトランが炎を向けようとした時、大蜘蛛は能面の口をガクつと開けた。瞬間。一面に張り巡らされていた白い幾何学模様が、物凄い勢いで吸引されていく。

支えを失ったリタルの小さな体が落下した。

「リタル！」

瞬時に炎を消したトランが辛うじてその体を受け止める。

そのすぐ横で、同じく落下していたクレープの体を、大蜘蛛のいやに屈折した二本の足がからめ取った。

伸ばしたトランの手は、後一步の所で宙を掴む。

「く……っ」

「……クレープ！」

その間数秒。クレープを抱えた大蜘蛛は総てを吸い取ると、息つく間も無く今度は自身の正面に向けて、腹から糸を噴出した。

放射状の縦線。次いで、横線。それは流れるような作業。瞬きす

る間に、細かい細かい網が、大蜘蛛とトラン達との境に薄い壁を作った。

「人間が……あまり調子に乗るなよ……っ」

4

「こんなもの……!!」

糸で出来た壁に向かって、トランが左手を真っ直ぐに突き出した。首から下げている指輪 もとい、禁術封石が赤く光り、掌に炎が生まれ出でる。

トランが念じると、掌の炎火が白網を焼き尽くすべく発射された。だが。

「なに……!!?」

「消失した!?!」

トランとリタルの驚愕の声が重なる。

確かに白網に燃え広がったはずの炎は、次の瞬間総ての勢いを失い、視界から完全に消え去ってしまった。

先程となら変わらぬ形状の白網が、何事も無かったかのように残っている。

「驚く事はないだろう」

白網の向こうから、しゃがれた声が響いた。

「おまえたちの所持する魔石の魔力を吸い取る事で存分に強化された糸だ。炎を防いでみせた所で、そうまで見事な芸当ではない」

「けど、さつきは破れたのに……っ」

「我の糸には数種類ある。先程までおまえたちを捉えていたのは捕獲糸。それをさらに強化したものがこの防御糸だ。まあ、糸の噴出量が制限されるのは難点だがな」

糸で出来た　　さながら、白いバリアを破ろうと、トランが必死に炎を繰り出す。操る炎は……もはや、炎と呼ぶべきか、否か。トランの意思を汲み、その精神で練り上げられた炎は今や、爆発と言ってもよい程の衝撃を瞬時に生んでいた。広げた掌から赤黄色の球体が現れたかと思えば、瞬間巨大化したそれは爆ぜ、莫大な炎塊となって白のバリアを襲う。

だが、それをもつてしても、バリアを破壊する事は不可能だった。結果は、最初と変わらない。爆炎は煙一つの存在も許されずに消え失せ、炎に襲われる前の状態のバリアが視界に現れるのである。

嘘のような光景だった。

だが、実際に目の前に起こっている。

「……………くそ……………」

乱打が幾度続いたか。奥底から吐き出したような悔しげな声が出て、ついに辺りが沈黙した。

体勢を僅かに崩したトランが、白い鉄壁を睨みつけたまま、肩で息をしている。

禁術と呼ばれる魔力の結晶である石は、所持するだけで消耗する力ある石は意思を持っているのか、魔力を行使しない時ですら所持者の体を巡り、精神力を削り続ける。

禁術を発動させる際には、所持者は所持しているだけの状態とは比べ物にならない程莫大な精神力を削ぎ落とされてしまう為、並大抵の人間は一度使うだけで卒倒する。

尤もトランの持つ『炎帝』と同じクラスの石を使おうとすれば、

卒倒だけで済む者など一握りもないだろう。

精神力の弱い人間は、言わば抵抗力の弱い人間。石に 正確には、石の魔力に体に乗っ取られ、魔人化してしまう。

魔人化してしまえば、人は決して人に戻る事は出来ない。それはトランだけでなく、『転位』『魔眼』の石を駆使しているリタルと同じ事。これらの事実は常識として、世界^{フロース} 人間に浸透している。

「トラン！」

禁術を連発したトランは、誰の目にも明らかに消耗していた。

精神力だけの問題ではない。先程まで蜘蛛の糸に全身を巻かれ、毒漬けにされていた身体だ。あれだけの炎を繰り返し、爆熱を発動させ……その衝撃に耐え続けた生身はもはや限界に近い。体中を大粒の汗が滴り、着崩していたワイシャツがべったりと纏わり付いている。

爆風で動けずにいたりリタルが駆け寄ると、今にも倒れそうな両足に力を入れ踏みとどまっていたトランは、それでも「大丈夫だから」と黒眼で制した。

「ようやく思い知ったようだな」

さも愉快そうなしゃがれ声が白い鉄壁の向こうから洞穴全体に響いた。

「……あたし。あんたが、その糸を使って記憶を覗いているとばかり思ってた。……けど、違うわね。」

あんたの能力　その糸は、魔力を吸い取るだけの糸。糸自体が強靱で粘着力もあるから、敵を拘束したり、バリア状にして鉄壁の護りを手に入れる事も出来る。

ただし、魔力を宿すのはあくまで糸で、吸い取った魔力をあんた自身が使用する事は出来ない。

それに、糸を強化　濃密な魔力の糸を使用したい場合にはその分、噴出量を少なくする必要がある。量を出せば出すほど魔力が分散してかっすかすになってしまっからね。だからあたしたちを捕らえる場所にこの狭い洞穴を選んだ……ってところかしら」

『炎帝』の発動で洞穴内の気温は上昇していた。既に汗の滲み出していた小さな額を、さらに一筋の冷たい汗が伝う。リタルが努めて冷静に声を上げると、

「ご名答。寿命が極端に短い人間の内でもより幼い容姿をしているが、なかなか。洞察力はあるようだ」

大蜘蛛は余興が気に入ったのか、血眼をリタルに向けた。

「お褒めの言葉、どうもありがとう。……てか、ほとんどあんたが勝手にくっっちゃべってくれた事だけだね。……けど、わからないわ。なんで、一向に共犯者サマはご登場されないのかしら？」

「……………」

「共犯者……だって？」

沈黙した大蜘蛛に代わって、リタルを守るように立っていたトラ
ンが声を上げた。

「そうよ。単独犯であるはずがないもの」

腕を組んで、きっぱりと言い放つリタル。

「……ほお。何故そう考える？」

あくまで、余裕を見せる大蜘蛛をリタルは鼻で笑う。

「さつきクレープも言ってた事だし、前にあたしも文献で読んだ事があるのだけど。魔族や天使は一体につき、一つの能力しか持つていないらしいじゃない。あなたの能力が『魔力を吸い取る糸』なら、あたしたちの記憶を覗く事は不可能だわ」

「……………」

「あんたはあたしたちの記憶からナニカの情報を得ようとしていたでしょう？ それが目的であたしたちを捉えたのなら、『他者の記憶を見る魔力』を持つ存在が必要不可欠はず。……というか、そいつがいなきや初めからあんたはこんな大それた事、しなかつたでしょうね。どっちが唆したかしらないけれど」

沈黙を守る大蜘蛛。畳み掛けるように、リタルは発言を続ける。

「あたしたちは、あんたみたいな巨大蜘蛛　魔族なんぞに面識はない。……リチウムはどうだかしんないけど。あたしが把握している限りじゃ無いと思うわ。」

そもそもあたしたち人間にとって、あなたの存在は空想の産物。

魔族が現存しているという事実は既に廃れていて、一般人にとってはおとぎ話なのよ。ちよくちよく姿を見せる天使と違って、あなたたち魔族は人界には現れない　姿を見せないからね。……なのに、一体あなたはどうかやって、求める情報をあたしたちが持っている事を知ったのか。

魔族が機械使って調べる、なんて事聞いたことない……てか、出来ないうし。あなたたち、自身の力しか使えないものね。機械も石化製品　魔石で動いてるから扱えないでしょう？

と、すると。あたしたちの事をあなたに流した何者が居るって事でしょう。天使か。……人間か

「……」
「人間……が？」

眉を潜めるトランをリタルが横目で見遣る。

「トランも警察のはしくれなら知ってるでしょう。……てか、その類を保管してるのは警察でしょ？」

「その類？」

「記憶を探る石。そんなものがあるのなら、人間にだって十分可能よ」

「……」
「けど、ま。あたしたちの……フォルツェンド一味の事を知ってる人間なんて、把握してるだけの存在しかいないと思う。あたしたちの事をリークするしたら、天使くらいでしょう。……記憶を覗く能力を持つ天使が現存しているかは知らないけど。」

後は……そうね、警察組織を所有しているのは、天使でしょ？

警察が保管している『他者の記憶を視る石』は『魔眼』と同様。術者以外にも指定した存在に働きかける事が出来る力らしいから、天使が人間に石を使わせ、その蜘蛛の化け物にあたしたちの記憶を覗かせたって事も十分に考えられる。……そうすると、共犯は複数

いるって事になるけど」

「……………てか、リタル。なんでおまえが『記憶を視る石』の事を知ってるんだ？」

「警察がその系統の石を占めてる事は、内部の人間しか知らないはずだが」と続けるトランのジト目に、不自然なまでに顔を背けるリタル。

「独自の情報網があんのよ」

「情報網って」

「……………さて。誰だか知らないけど。いつまでも高みの見物決め込んでると、絶対的に痛い目見るから、さっさと出てきた方が身のためよ。あたしが回復したらすぐに『魔眼』を発動させるから隠れても無駄だし。トランの力を見たでしょう？ 早くその身を護る事しか能のないへっっぽこ魔族に護ってもらう事ね」

リタルが周囲へ視線を巡らせた。

投げた声に応えは返ってこない。

「というか。捕まってるからこれまで、大蜘蛛以外の気配は一切感じとれなかった。」

「きっぱりと言いつつ放ったリタルだが、総ては推測。状況から推理したことでしかない。」

「すなわち、当てずっぽう。」

「気力回復を狙ったの時間稼ぎと、ただ単に大蜘蛛の余裕が全くもって気に食わなかったという理由で口から飛び出した。まだ纏まっていなかった考えを口にしながら組み立てていったという、まさに掘っ立て推論なのだ。」

「……………」

……はずれ、か？

緑色の透き通った瞳。その上の薄い眉がほんの少しだけ中央に寄った、その時、

「すばらしい」

大蜘蛛の感嘆の声が長い沈黙を打ち破った。

6

「まさかここまで見破られるとは思わなかった。いや、楽しませてくれる」

僅かに発光しているクレープの体を抱えたまま、大蜘蛛は声を上げて笑った。

「認めてやろう。我は少し人間と言う種族を侮っていたようだ」

「……………共犯者は何故出てこない訳？ もったいぶってんの？」

大蜘蛛の反応に驚き、しばし呆然と佇んでいたリタル。推測が正しかった事を悟ると気を取り直して軽快に笑う魔族を睨む。

「さてな。我は知らん。『共犯者』と言っていたが、我等はあくまで、利害の一致で手を組んだだけの関係。大方、奴は奴で事を成し遂げ離脱したのではないか？」

「相手の目的も知らないで協力していたのか？」

「話を持ちかけてきたのは奴の方だ。奴は我の目的を把握していたのだろうが、我は奴の目的になんぞ興味もない。敵対の間柄でもない。したがって事が済めば、もう互いに用はない」

「……………」

大蜘蛛の言葉に、口元に手をやり何かを思案するリタル。そこへついに、思考を絶つ程の絶望をもたらす声が降る。

「……さて。人間風にいえば、『冥土のみやげ』というのであろう？ 楽しませてくれた礼にたつぷりとくれてやったと思うが。そろそろ食事をはじめてもよいだろうか」

全員に緊張が走る。

「リタル」

「不味いわね……思ったより精神力の回復が遅い。クレープもきつとさっきので打ち止めよ」

リタルが小声でトランに相槌を打つ。

クレープは、幽体時は何の力も使えない。しかしグレープの体を借りて現存する時、二つの力を使うことが出来た。

一つは浮遊。そして、もう一つは、他者の力。石の魔力を高める増幅の能力である。

クレープは有体時であろうと石を使う事は出来ない。体の持ち主であるグレープの、あらゆる石との相性の悪さが原因なのか、破壊こそはしないまでも魔力を発動させるまでには至らない。二つの力は真正銘クレープ自身が有する力である。

だが、幾ら自身の力といっても、他者の体を借りて発動させるが故、力の使用には制限があった。

それは、増幅対象である石まりよくによっても左右される。

『炎帝』のような禁術封石の力を増幅させる場合は、クレープの調子が最も良い時で二回が限度。それを越えれば、グレープの体に入っている状態そのものに支障を来たす。

だからクレープはいつも、ここぞという時でしかその力を使わな

かった。

先程もそうだ。『炎帝』であれば蜘蛛の糸を打ち破れる。勝機を見出して彼女はその力を発動させたのだろう。……だが。

大蜘蛛に捕らわれてから、勝気なクレープが全く口を利かなくなつた。おそらくクレープの中に居続ける状態を維持しているだけでやっとなのだろう。

「今、あたしの力を数回使わせてくれれば、脱出くらい訳無く出来るのに……」

リタルに『転位』を扱う力は残ってない。三日前から、ずっと大蜘蛛の糸に毒を与えられ、力を吸い取られていたのである。こうして立ち続ける事ですら辛いだろう。この状態では比較的楽に発動させる事の出来る『魔眼』でさえ、行使する事は難しいかもしれない。

「捕らわれたのがクレープだけだったら挑発なんてしなかっただろうし、きつとこんな窮地には追い込まれなかったわよ……。ううん、クレープが捕まったら、糸の魔力くらい暴走させてくれてたかもしれない。全くなんだってこんな時に合体してたんだか……。……って。

……あれ？」

「どうした？」

リタルの疑問符に、トランが僅かに振り返つた。

「なんで、クレープ。入ってたんだらうって思って」

「入ってたって……」

「だから、クレープの体によ。あたしたちの事探すだけならなにも、クレープがクレープの中に入る必要なんてないでしょう。普段からクレープ、何かある時でないとかクレープの体借りないんだし。搜索だって手分けした方が効率がいい。一心同体じゃあるまいし、グレ

「プが攫われたら、クレープは当然ここに居ないはず」

「……そういえば」

「……………」

短い沈黙。

「……ひょっとして」

リタルが、確信めいた呟きを漏らした時。

「何をこそこそやっている？」

大蜘蛛の声が白い壁の向こうから響いた。

向き直るリタルとトラン。

「……どっちにしろ、間に合いそうにないわね」

覚悟を決めたりタルの声。現状を突破する為にあらゆる可能性を模索していた彼女が、今、思考を完全に切り替えた。今ある材料だけで解決策を導き出さねばならない。

トランは両手をぎゅっと握りしめた。捕まっているクレープ。後ろでふらふらの両足にむち打って立ち続けているリタル。なんと少しでも無事に帰してやらねばならない。しかし、自分にあるのは炎帝と、この身一つだけ

「リタル」

トランは正面を向いたまま、少女の名を呼んだ。

「俺だけでも、壁の向こうに飛ばせないか？」

「……やれと言われればやってみるけど。自信は無い。でも飛んでどうすんの？」

クレープの力で増幅したトランの最大の攻撃でも、あの糸の護りを破る事は不可能だったのだ。目の前のバリアを越えたところで、蜘蛛が再び防御の一手に出れば成す術はないだろう。

攻撃を防がれたら 手は無いどころか、トランさえ危くなる。今の彼の疲労困憊ぶり。体力がとくに限界を超えている事。この状況を、誰よりもリタルは把握している。状況は極めて悪い。だが

トランの答えはシンプルだった。

「飛んたら考える」

それでも、やるしかないのだ。

例えるならば、追い詰められた崖の先端。

それでも進まなければ、動けない。

動かない。死の神も……幸運の女神も。

この足が立ち止まれば、真っ先に忍び寄ってくるもの……それは、光の差し込む隙間も無いほど濃厚な闇。絶望だ。

知っている。もう、嫌と言う程理解している。

諦めてしまえば、何もかもを失う。己を取り巻く世界を動かす事も……増やすことだって、出来なくなる。

小数点以下。ほんの僅かだが、確かに存在している……可能性を。

「……………わかった」

トランの決意に自分も覚悟を乗せて、示すように、真っ直ぐに前を見た。

今はただ全力で、今できることを成すのみ。

なんとしてでも自分は、トランを飛ばす。

「諦める事だ。おまえ達では我に敵わない」

二人の強い視線を受け、クレープに向き直っていた大蜘蛛はしわがれ声を上げる。

「そこで見ている。仲間の最期を」

散々衝突いた人間は、既に発光を止め、先程からピクリとも動かない。

完全に麻痺したか。一瞬でも己に脅威を抱かせた少女を、大蜘蛛は鼻で笑った。やはり人間風情がどれほど足掻こうと、最初から勝敗は定められていた。少女の放った光は、退屈していた神が気まぐれに与えた奇跡の上に成り立った現象^{まぐれ}で、この状況こそ当然の成り行きなのだ。

「散々大口を叩いていたようだったが。それももう終わりよ」

大蜘蛛は、細い体を岩肌の地に下ろす。

ひやりとした感触に、クレープの身は微かに震えた。

もう、あまり余力はない。体がいう事を利かない。

周りの言葉、空気ですら、届かない所に彼女はいた。

ここは、焦燥感の中心。

これ以上力を使えば、瞬く間にこの体を追い出され……グレープに戻ってしまう。グレープだけを危険に曝してしまう。

溶かされる心身。食われる痛み。消え行く魂。この恐怖の真中に。しかしこのままでは

いいんですよ。

大蜘蛛の興味がリタル達に向いていたその時。
瞳を閉じ、ただ葛藤を繰り返していたクレープの内から、鈴の音がした。

(いいですよ。クレープさん)

クレープ……。

(いいのです。だから、クレープさんは)

鈴の音は、体から剥がれかけてるクレープの身を案じてか、自分が主導権を握らないように、遠慮がちに、小さく、

(クレープさんは、クレープさんのやりたいようにやっちゃってください)

だが、確かに響いた。

(みなさんを、護ってください)

「数百年ぶりの人間だ。……結局正体はわからなかったが、この希有な力。さぞ極上の味がするのだろう」

クレープの体に、現実感が返る。

はつきりと、敵の声、体。置かれている状況を認識して、感情が逆撫でられる。

「……………めん……………」

クレープは、微かに唇を動かした。

「なんだって？」

「……………」

その半開きの瞳は、今、再び蜘蛛を射抜き。

僅かな驚異を抱いた蜘蛛に、パクパクと動かした口は、確かにそう呟いていた。

なめんな。

瞬間。

金色の光が大蜘蛛の視界を奪った。

「な」

堪らず目を瞑る。

発光したクレープは、目を閉じ全意識を集中させ、トランとリタル、双方へ力を注ぐ。

「クレープ、あんた……………！」

「急げリタル！ 助けるぞ！」

先程は微塵にも感じられなかった魔力が、今この体の中で、溢れんばかりに膨れ上がっているのを感じる。

トランは、静かに目を閉じた。

力が使えるからと言って、せいぜい一発が限度。状況は変わらない。失敗すれば、もう後はない。

綱渡りを想像した。

今、ここに、綱は張られた。

渡るのは容易い。しかし問題は、渡りきった後だ。

そこに、梯子が存在しない事はわかっている。

平穩へ降りる事の出来る梯子はゴールまだ遠い。

その先へ、そこまで。果たして自分たちは新たな綱を張る事が出来るのだろうか……。

「いくわよ！ トラン」

リタルの必死の声に、体が反応した。

……そうだ。

目の前にある綱は、先程までは存在しなかったもの。渾身の力で張られた唯一の路だ。

渡りきらなければ、次の路も見えてこない。

立ち止まる事は、許されない。

……いや。

自分こそが、許さない。

下を見るのを止め 強い意思の籠った黒瞳が、開かれた。

リタルが意識を集中し念じると、魔石は持ち主に応じて淡い緑に発光する。光は大きく膨らむと爆ぜ、覚悟を背負った二人の体を、瞬く間に消し去る

その予定だった。

「……………なに？」

突然の出来事に、リタルは意識を奪われ、緑の光は消滅し、トランは呆然と立ちすくんだ。

しかし、この場で一番驚愕していたのは、誰であろう大蜘蛛だっ

た。

黒い、黒い。辺りを支配する闇よりもなお暗い、拳大の弾が突如飛んできたかと思えば、目の前の白いバリアを意図も簡単に打ち破ったのである。

「……………」

さらに糸の壁を破っただけでは飽き足らず、黒い弾はその速度を保ったまま、大蜘蛛の腹を抉った。

「……………は？」

先程までは、あざ笑っていたのだ。

ちっぽけな存在たちが徐々に絶望の色に染まり、成す術もなく自分を見ている。元から定められた現実の中で……………それでもなお、もがき続けている、この見世物を。
楽しんでいたのだ。

「……………」

腹部に痛み。

意味が解らない。

能面は己を振り返り、ようやく、自身の腹にぼっかりと空洞が空いている事を理解した。

「なに……………？」

在り得ない光景。

それをもたらしたものが、ソレである事に。

混乱し、強制停止してしまった思考が現状を把握するのに、数十

秒を要した。

「……………まさか。何故。ここが」

掠れた声で、ようやく生じた疑問をそのまま口にする。

「……………なんでもへったくれもねえだろ？」

洞穴の奥から、響く足音。

「……………つたく」

「やっと来たか……………」

響いた声に、リタルとトランが、此処に来て初めて安堵のため息を漏らす。

一陣の風が吹き、洞穴の中　舞台へ、何者かが姿を現した。

「それが、俺様だからだ」

絶望という名の闇を切り裂く声に、その場に居た全員が、ようやくその姿を視界に入れた。

闇の中でも輝く、銀色の髪。

すらっと伸びた長い手足。

程よく筋肉の付いた身体。

透き通るようなブルーアイ。

非の打ち所の無い井出達はまるで、精巧に作られた人形のようにだ。夜の神々を魅了する、白銀を持つ男。

「リチウム・フォルツェンド……………！」

大蜘蛛が、たじろぐ。

「……遅いのよ。ネボスケが」

地に横たわり、消える寸前の意識。それでも未だ自身の髪色と同色の光に包まれたまま、クレープがぼそりとボヤいた。

7

名を呼ばれ、そちらを向き直ったりチウムは、その青い瞳を動かして全体を把握すると、感心したような声を上げた。

「……あの蜘蛛の化け物か。俺様の子分たちを一匹残らず掻っ攫いやがったのは」

「子分じゃねえ！」

「匹つてなによ！」

リチウムの言葉にくわつと目を見開くトランとリタル。硬直した場は、一瞬にして殺気に満ち溢れる。

「大体遅すぎるのよあんた！ 今までどこほつつき歩いてたの？」

居場所解つてたんならさつさと来なさい！」

「は？ 解つてたつて……ああそうか、レーザー魔石探知機か」

「馬鹿トラン！ 魔力を吸い取られてたいし禁術封石がレーザー魔石探知機に引つかかる訳がないでしょ！ かといってレーザー魔石探知機が魔族を示すとは思えないし。大方クレープになんか持たせたんじゃないの？ で、その反応を追ってきたと」

「さすがは俺様の相棒。解つてんじゃん」

「クレープがクレープになってたのも、石化製品を持たせてたからでしょう。クレープのままじゃ、持たせただけで破損しちゃうから

……って、調子に乗らない！ あたしを散々待たせたってのは事実なんだからね！」

「んな事言っただって。朝は殺しちゃ駄目なんだから？ だから夜まで待っててやっただけ？」

形の良い顎をくいっと大蜘蛛に向け、飄々と答えたりチウムの様子に「ったくもおお……」とリタルは大きなため息をつく。

「まあいいわ。この賠償は後でたっぷり請求させてもらうから」

「賠償って……俺様これでも急行したんだぜ？」

「言っただしよう、その話は帰ってからゆっくりと」

冷やかな笑顔、押し殺してはいるがそれでも全身から滲み出る殺気に、リチウムはうつと呻いた。

「怒らせるおまえが悪い」。腕組みしたトランが辛辣に突っ込む。

「それより、ひよっとしたらこれまでのやりとりも聞いてたかもしれないけど、念の為伝えとくわ。無駄に気力を使うのはもう避けたいから、一度しか言わない。耳の穴かっぽじってよつく聞きなさいリチウム」

リチウムが素直に頷くのを見届けてから、リタルは得意の早口で一気に捲し立てた。

「そこに居る蜘蛛の化け物は、普通に、巨大化しただけの蜘蛛だと考えて……って、普通じゃないわね……前言撤回。無駄口叩くのが大好きよ。そいつ。

あの糸は有限。でも、強靱よ。性質は蜘蛛の糸そのもの。それだけならトランが難なく仕留めたでしょうけど。アレはあらゆる石の魔力を吸い取る。……まああなたの禁術封石は発動させた状態なら

大丈夫みたいだけど。それでも、捕獲されたら成す術はないと思うわ」

「なるほどな。それでんな面倒な事になった、と。……おまえらは？ 動けるか」

リチウムの青瞳に映ったリタルが首を横に振る。

「あたしもトランも、クレープの力を借りてなんとか……ってとこ」
「リチウム。クレープはもう限界だ」

前方を睨みつけたままのトランの声に、リチウムは、ふむと頷くと、

「おまえらが、一回ずつ使えるならいい」

そう言って、二、三步前へ出た。
長い髪と、マントが優雅に翻る。

目前には白いバリア。

中心に、一人がなんとか通れる大きさの穴がぼつかりと空いている。

その向こうに、腹に風穴の開いた蜘蛛と、力無く地に横たわったクレープの体。

「さて。やらかしてくれたようだな。巨大無駄口蜘蛛」

腕組みをし、仁王立ちしたりチウムは、呆れ顔で蜘蛛を直視した。
蜘蛛は動かない。

そこだけ時を止められたかのように、微動だにしない。
反応の無さを不審に思ったリチウムが眉を潜めた時、

「おまえが」

蜘蛛が、呆然と呟いた。

「おまえか……我等が主の結晶を扱うのは」

「あん？」

リチウムが首を捻る。

「主の力を扱う人間か……。話を聞いた時は半信半疑だったが。……まさか同じ姿をしているとは。これでは目障りと言つのも無理もない」

改めてリチウムの姿を上から下まで眺める大蜘蛛。

「本来なら、目を改め隙を見て奪うつもりだった。正面からでは到底太刀打ち出来ないからな」

ゆっくりと。声色を平常に戻した蜘蛛は、僅かに体勢を低くした。どうやら、完全に理性を取り戻したらしい。

「そらどうも。寝首をかく予定、狂わせちまってすまん」

後頭部を掻きながら、淡々と言葉を返すリチウム。

「……だが。こうなってしまうては仕方がない」

言って、蜘蛛は数本の足をクレープの首に添えた。

「……………」

「交換条件だ。この女と引き換えに、渡してもらおう。我等が主を」
「……姑息な真似しやがって」

そこまで黙ってやり取りを見ていたトランが唇を噛む。

「つか、おいこら。俺様から禁術封石奪っておいて無事逃げられる
とでも思ってたのか？」

それでも仁王立ちの体勢を崩す事なく、リチウムは淡々と問い返
す。

「……逃げられんかもしれんな。おまえが、他にどんな結晶を持ち
合わせているのか、なんて、我は知らん。だが、主さえ取り戻す事
ができればいい。我等の領域へ飛ばす事が出来れば、後は同志が引
き受けてくれるだろう」

「同士、ね。魔族も天使と同じように自在に行き来できる訳か……」
「自在に、という訳ではない」

リタルの呟きに、大蜘蛛は首を振る。

「天使はどうだか知らんが。我等個々では異空間同士を繋げる事な
ど到底敵わん。自在に行き来できる者が居るとすれば、おまえの持
つ転位の力と同等の魔力を持つ者だけだろう」

「それじゃあ、魔界に居る同志ってのが転位の力を持ってるとして事
？」

「さてな。……お喋りの時間はこれで終わりだ」

クレープの体を僅かに持ち上げた大蜘蛛は、静かに言い放った。

「リチウム・フォルツェンド。主を渡してもらおう」
「……………」

重い沈黙が、辺りを支配した。

「リチウム……………」

「……………」

誰もが固唾を呑んで状況を見守る。

目を細めたリチウムは、それでも真つ直ぐに蜘蛛と、クレープを見た後、大きな溜息について、深く肩を落とした。

僅かな間の後。

「……………わあつたよ」

空返事が洞穴に響く。

リチウムはもう一度溜息を吐いた後、さも面倒臭気に左手に装着しているグローブの禁術封石を外しにかかった。

「って、リチウム！？ あんた……………いいの!？」

我に還ったリタルが間の抜けた声を上げた。

トランもポカンと口を開けて、リチウムの背を見ている。

……………いや。ここでリチウムが拒否していれば、クレープの命は無
い訳だからして、悔しいけれど今は言いなりになるしかない。…………
のではあるが。

素直なこの行動は、如何せん、この男らしくない。

衝撃を受ける程、全くもって、この男らしくない。

「黙って見てろ、リタル」

不機嫌に言うと、彼らの反応を視線で制するリチウム。リチウムはリタルと同じ型の指貫手袋を装着している。リタルが両手に装着しているのに対し、リチウムは左手のみ。なおも啞然としたままの二人を無視して、リチウムは手袋の金具を片手で器用に外してみせた。

手の甲に嵌っていた虹色の禁術封石を、ころんと右の掌に乗せる。

「……………！」

淡々と行われる作業を近距離で見っていたリタルが、僅かに息を呑んだ。

「ほらよ。おまえの主とやらだ。受け取れ」

力なく言って、リチウムは手にした禁術封石を放った。

白いバリアに開いた穴を通って。

軽い音を立てて岩肌を転がると、禁術封石は、クレープの手元でその動きを止めた。

クレープがそちらを見遣る　その目が、大きく見開かれた。

「おお……………、おお……………！」

大蜘蛛が、歓喜の声を漏らした。

何もかもを忘れたように、石に魅せられている。

その間、リタルが動いていた。

「……………リタル……………？」

「黙って」

静かにトランの横に移動したりタルは、そちらを見る事なく片手でトランを制した。

「ついに我等が主が……！」

大蜘蛛は何本かの足を、目の前の禁術封石に伸ばした。

「お戻りになる……！」

だが、蜘蛛の足が禁術封石に触れるより早く、クレープが麻痺に震える手で禁術封石を握る。

「……！？ 今更なにを……！」

「戻れ！ クレープ！」

大蜘蛛と同時に響く、リチウムの大声。

瞬間。クレープがグレイプの体から離れてゆく。

「……なに……に……！」

「やったれグレイプ！」

グレイプが、その赤い瞳を開いたその時。

世界は、花で覆われた。

8

「な、なんだこれは……！」

花の中で、くぐもった声がする。

このしゃがれた声は大蜘蛛だろう。

辺り一面に敷き詰められた花　もとい、魔力が、いつか誰かの記憶で見た『念じれば念じるだけ花が出る禁術封石』であったことに果たして気づいただろうか。

暗い洞穴の最奥。総ての者が例外なく、花によって動きを封じられていた。

白いバリアは今もなお、花に触れると同時にその力を吸い取り、次々と花を消し続けている。

だが、それでは到底間に合わない。

「そのまま伏せてろ！　合図するまで禁術封石離すんじゃないぞクレープ！」

口内に花が入らないよう、口元を腕で押さえたりチウムが、左手に黒い石を装着した。

そう。

本来彼が所持し酷使用する禁術封石の色は、黒。無を凝縮させた禁術封石。

『死球』

「リタル！」

花の中、間近に在る緑色の淡い光に呼びかけるリチウム。

その光は、『転位』のソレより数段濃い。

『魔眼』だ。

クレープからもらった　残った力を振り絞って、瞳を瞑ったりタルがそれに応える。

リタルには、はつきりと映っている。

大蜘蛛の姿。

グレープの姿。

『魔眼』は視界をふさがれたリタルの脳裏に、望む情報を叩き込

んてくれた。

だが、それを仲間に転送する程の精神力を今の彼女は持ち合わせてはいない。

「トラン！ 二時方向！ 目線より少し上に叩き込んで！」

口を手で覆ったりタルは声を上げると即座に場に伏せた。

トランの返事はなかった。

が、代わりに、赤い光が灯る。

刹那。猛り狂う炎が、花と……花の魔力を吸い取っていた白いバリアを今度こそ焼き払った。

さすがの鉄壁も、花の魔力が桁違いな為、同時に炎を吸収する程の容量は残っていなかったらしい。

「な！」

直線上の花が総て消失し、大蜘蛛とグレープの姿が垣間見えた。

炎は大蜘蛛の位置から僅かに離れた方向にとんだようだ。

……だが、それでいい。

「グレープちゃん！ 石を離して！」

発言と共にトランも伏せれば、その後ろに来ていたりチウムが姿を現した。

「生憎だがな。俺様これ一つっきゃあ持ち合わせてねえんだよ……！」

構えられた左手の甲で、黒い、無を宿した禁術封石が光る。

「……………!!」

再び視界を塞ごうとする花の隙間から差す黒い光。その光こそが、自分の求めていた存在であった事に、大蜘蛛は気づいた。だが、

「くらいやがれ!」
「デスボール死球!」

大蜘蛛へと真つ直ぐに伸びた左腕、その掌から、無の玉が生まれ出でる。

空間そのものを呑み込み急激に膨張しながら、息つく間もなく己に迫る「無」。

この世のあらゆる道理を無視した、問答無用の存在はまるで悪夢だった。

「……………!!」

視界が花に埋もれる寸前。大蜘蛛は、望み焦がれていた黒光に全身を吞まれ、その意志共々、消滅した。

9

「……………俺様が、……………甘かった」

リチウムが、がつくりと頂垂れた。

「炎帝でトドメをさしてりゃ、蜘蛛の魔石が手に入ったってのに……」

ただ働きだと、嘆く。

「『魔力を吸い取る糸を出す石』なんてのがあれば、ほぼ無敵じゃねえか……」

『死球』は文字通り、触れたものを「無」にする。
したがって、大蜘蛛はその存在自体が「無」となり、持っていた魔力共々消失したのだ。

「……てか。俺は後一回しか炎を出せなかったんだぜ？ ああするより他なかったじゃないか」

トランが横から口を挟むが。

「俺が花蹴散らして、おまえがトドメさしてりゃよかつただろ？」

『「死球」を当てずっぽうでぶっ放すな！』

洞穴の中、トランとリタルの声が八モる。

「だってよ。あの蜘蛛の石がありゃあ……」

言ってリチウムは辺りを見渡した。

「もうちつと早くここから脱出できただろうが」

相変わらず、辺りは花だらけだった。

「文句ばかり言っていないで、さっさとグレイプ探してよね。その周りに落ちてるんだし。あんたが一番ぴんしゃんしてるんだから」

仰向けに倒れていたリタルが、顔を両手で覆いながら声を上げる。

リチウムは声にため息を返すとボソツと一言。

「『魔眼』が使えたらなあ……」

「無いものねだりしたって仕方ないつつてるでしょう！ あんた、あたしが魔人化したらどうしてくれるのよ！？ それともリチウム！ 代わりにあんたが使う！？ なんなら貸すわよ！？」

「冗談。俺様の属性じゃない」

「てかあんた、試してないじゃない。これを機に試してみたら？ 案外なんとかなるかもよ？」

「……つつつか」

リタルが冷たく言い放てば、即答で答えが返ってくる。

「俺様やだ。そんなこまんちい力」

「……あんたね」

「てか、早いトコ見つけようぜ？ 禁術封石を破壊すればこの花だつて消える。リタルとクレープはその間休ませて力を蓄えてもらえば、転位でひとつとび帰り、出来るだろ？」

喧騒の隣で、溜息混じりにトランがボヤいた。

トランとリチウムは地を這い、手探りでグレープを探していた。

一瞬彼女の姿を見ているとはいえ、花を掻き分けながら進んでいるのだ。真っ直ぐ進めているかすら、正直自信がない。

「そうよ。ここにはこのあいだみたいな、邪魔な物はなを一瞬で取り除いちやう、かわいい便利な機械ちゃん、なんて素晴らしいものはないんだし。……まあ、花禁術は少し勿体無い気もするけど、この際仕方ないわね」

「かわいい便利な……って。あの巨大で真四角な、ネジやらメーターやらいろいろなもんをごちゃごちゃ取り付けた特大掃除機ジャンボがか？」

「ってな訳で、あたし寝るわよ。さつきからクレープの声もしないし。あの子もその辺で寝てるんじゃない？」

「クレープさんなら、ここで寝ていらっしやいますよ」

「って、クレープ。あんたなんでそんな小声なの？ 探しにくいでしょ」

「ですが、大声を出してしまうとクレープさんが起きてしまいます。よろしければ、私が見なさんの所へ向かいますが……」

『動くな！』

全員の声が見事に八モった。

「あんたが動いちゃもつと禁術封石が探しにくくなるでしょうが！ いいから大人しく座ってなさい！ あんただって麻痺ってるでしょ！」

リタルの抗議にクレープが小声で返事をする。

やれやれと一同が胸を撫で下ろした。その時。

『助けてさしあげましょうか？』

花の向こうで、声が聞こえた。

「……………げ」

リタルが閉じかけていた目を開け、トランが大袈裟に溜息をつき、リチウムがジト目で天井を仰ぐ。

瞬間、突風が巻き起こり、煽られた花が洞穴の口へと吹き飛ばされていく。

風の流れの中心に、男の姿が浮かび上がった。

清らかな白い衣を纏い、その背には堂々たる白翼。足元まで伸びたストレートの金髪を後ろで一つに纏めている。

宙に浮く男の顔は、リチウムに酷似してた。

違うのは色白の肌と、髪の色。切れ長の金の目に眼鏡をかけているところだ。

男は二対の白翼を悠然と動かすと、静かに地に降り立った。

「ファーレンさん。お久しぶりです」

その背中に、グレイプが笑顔で声をかける。

振り返ると、ファーレンと呼ばれた男は上品に微笑んだ。

「お久しぶりです。グレイプさん」

「って、居た居た、グレイプちゃん」

男の前を無遠慮に横切って、トランがグレイプに駆け寄る。

「……………」

「怪我はない？ …… って、噛まれてるんだっただね…… 麻痺してるのかい？」

「はい。けど、大丈夫ですよ。段々感覚が戻ってきました」

「無理するなよ？」

トランが屈んで助け起こすと、素直に頷くグレイプ。その柔らかい表情に安心したトランは静かに微笑んで 傍らに転がっていた虹色の禁術封石しじいしを拾った。

「リチウム」

投げられた禁術封石を左手でキャッチすると、リチウムは、握り締めたまま『死球』を発動させ、花禁術が消滅する。

瞬間、場に残っていた総ての花が消え去った。

改めて互いの無事を確認した後、全員盛大に安堵の溜息を漏らす。クレープの姿が見えないのは、『魔眼』を所持しているリタルがまだ回復していない為だろう。

「……一応、礼を言うわ。ファーレン。助けてくれてありがとう」

畳んだ羽に埃でも付いていたのか、優雅に叩いていたファーレンは、リタルの棒読みに顔を上げると、

「いいえ。貴女方が困っていると、風の噂で聞きつけましたので眼鏡をクイッと押し上げる。」

「風の噂、ねえ……」

ジト目で睨むリタル。

「てか、今回の件。仕組んだのはてめえだろ？ ファーレン」

同じくジト目で睨んでいたリチウムに振り返ると、その眼鏡は不気味に光り、笑顔は凶悪に歪んだ。

「やありチウム。いつかぶりだね」

「『やあ』じゃねえだろうが。しらはつくれんのも大概にしとけや」
「リ、リチウムさん喧嘩はいけませんっ」

焦るグレイプ。立ち上がろうとするも、まだ麻痺が残っているのか、その細い体は崩れ落ち 脇に居たトランがしっかりと支えた。

「いいのよグレイプ。本当の事だから」

言って、リタルが再びファアーレンに向き直る。

「蜘蛛の魔族にあたしたちの情報じょうほうを流したのはあんたでしょう？
ファアーレン」

「さあ。私にはなんのことだか」

強い碧眼を向けられ、大袈裟に肩を竦めてみせるファアーレン。構わずに、リタルは言葉が続ける。

「あの魔族。頼みもしないのに勝手にベラベラ喋ってくれたわ。魔族が狙ったのは『死球』のようね？ ……もう少し噛み砕いて言っ
てあげましようか。あたしたちがフォルツェンドー味である事。
『死球』を所持している事。この二つを把握してるのは、グノーシ
ス一帯を管轄している上級天使であるファアーレン。あんただけよ。
そしてなによりあんたが管轄外であるこの地に現れた事こそが、決
め手さだめ。 ……どう？ あたしを納得させる事が出来る位に立派な反論
を閃ひらいたってのなら聞いてあげてもいいけど」

しばしの沈黙。

やがてファアーレンは深い溜息をつき、

「 ……蜘蛛の分際で。お喋りな」

金の瞳を細め、今はいない魔族を罵った。

「あんたの目的はなんだったの」

問いにリタルを振り返るファールン。その表情はしかし、いつもの涼し気なそれに戻っていた。

「そうですね……貴女方の戦力分析、といったところでしょうか」

「……今更？」

「天界の脅威と言えば、禁術封石を使える人間ですよ？ その中でも、私は貴方方に一目を置いている。『死球』を扱うリチウム。『炎帝』を扱うトラン。どちらの禁術封石も相当強力な魔力の塊。にも関わらず、魔人化の予兆もなく、人の身で見事に使いこなしている。それに、貴女も珍しいですね。『転位』『魔眼』なんて変わり種を二つも自在に扱えるのですから。……尤も。中でも一番不可解なのは」

ファールンはそこで言葉を切ると、視点を落とし、座り込んでいるグレイプを見た。

その表情はあくまで穏やか。

彼はグレイプを見る時にだけ、険を解く。

「……？」

見つめられて、戸惑いの表情を浮かべるグレイプ。

彼女を護るように、間にトランが立った。その精悍な顔付きに、ファールンはフツと笑みを零す。

「……まあ、彼女の記憶を探る事は、どういう訳だか。取り調べの際に使用する天石を用いても覗く事は出来ませんでしたかね」

「警察の人間がここに居たのか？」

「いいえ。人間を遠隔操作したのですよ。トラン。私の能力です。」

貴方も知っていますよね？　ちなみに、操っていた間、その方の意識はなかったでしょうから。貴方の事はばれていません。……そういえば、クイ口警部？　貴方は未だ警察機関に留まっているのですね」

「……僕の勝手でしょう。それとも手っ取り早く上に報告して僕を追い出しますか？」

トランが言葉を改めると、ファーレンは眼鏡を押し戻す事で瞳に浮かぶ愉悦の色を隠した。

「さすがの私も、そこまで無粋な真似はしませんよ。貴方は禁術封石を多用しない。加えて、使う時は相応の事態が起こった時です。持っている物はともかく、貴方自身はさほど危険分子ではない。

貴方から石と職を取り上げる事はいつでも出来ます。それよりもこのまま黙って泳がせておいた方が断然面白い。トラン。私は、貴方を守っているのですよ」

「……………」

トランの無然とした表情を満足気に見下ろしてから、ファーレンは再びリチウムを振り返った。

「そんな訳で。貴方は自身が思っている以上に特異な存在の集まりです。天界や人界の治安を維持する警察機関幹部の一員としても実に興味深い。

貴方もご存じのように、私の使命は人界にある魔石を見つけ出す事のみ。もう一つ言わせていただくと、トランをはじめ、貴方の拳動は私個人の娯楽の一つです。故に危害を加えるつもりもない……これで納得いただけましたか？　今回の件も、単に現時点での貴方方の力量を把握する事が目的ですよ」

「で？　把握した結果。脅威には到底なり得ないと判断したってか

？」

「飲み込みが早い事だけが良い所ですね。リチウム」

にこやかに、笑うファーレン。しかし、その目は笑ってはいない。見つめれば吸い込まれてしまいそうな程深い金の瞳には、その視線だけで対象者を呪い倒せそうな程の殺気が宿っている。

「お上の脅威にはならない。私が今此処で全員を始末するのも容易いことでしょう。しかし、貴方は 世間では『大泥棒』などと騒がれているようですが、実際行っている行為は『手段を選ばぬストーンハンター』。ここで始末するには大変惜しい。という訳で、もうしばらく黙認を続ける事を決めました。また珍しい禁術封石を見つけたら、横流し、よろしくお願いしますね」

白い衣にエチケツトブラシをかけたつ「お得意様価格で買い取りますよ」と笑むファーレンに、舌打ちするリチウム。

「んな最もらしい御託、ぐだぐだ並べてねえで、シンプルに言えばいいじゃねえか」

ぴたっと。

ファーレンの優雅なブラシ捌きが止まる。

「と、言いますと？」

「ただ単に、こないだの仕返しがたら仕組んだ事だろ。この騒ぎは」

金色の切れ長の瞳が、眼鏡の奥でキラリと光った。

「……………覚えていましたかリチウム。いや、優秀な私と違って記憶力皆無な貴方の事です。すっかり頭から抜け落ちているのではないかと懸念していました」

調子を崩さず、あくまで丁寧な口調で話すファーレン。

「……………執念深い天使も居たもんだぜ」

「そういえば貴方。よくもあんなに都合よく現れましたね？　しかも花禁術まで持ってきて」

「まっはじめにリタルを狙った蜘蛛の手際が悪いんだよ。転位の石持ってるリタルが逃げられないってこた、禁術が使えない状態にあるってことだろうが。何が起こってるのかさっぱり検討つかねえし、こっちも慎重になつて、だな。クレープの髪留めに盗聴器付きの発信器つけて夜道を廻らせてみたんだ。思いのほかすぐ引っ掛つてくれたぜ」

リチウムの言葉に、途端、ファーレンは神妙な顔付きになると眼鏡の位置をクイッと修正した。

「成程。攫う手順まで指示しないと駄目でしたか……………参考にして以後気をつけます」

「おい」

「てか、ちよい待ち。そういえば訊きそびれてたけど、リチウム。あんたこの潔癖性悪天使に何言つて恨み買ったのよ？　あたしたちだつてここまで巻き込まれてんだからね。聞く権利あるでしょ？」

「んあ？　言つてなかつたっけか？　『おまえの母ちゃん……………』」「リチウム！！」

トランとリタルの静止の声が八モる。

天使の全身から迸る殺気が一気に膨れ上がった為だ。

「じゃなくてっ ……なんでんな会話になったのよ？ あんたその日は、さっきの花の禁術封石を売り捌きに行っただけでしょ？」

「……なんでだっけか？」

「さあ。なんででしたっけ？」

リタルに訊かれ首を捻り合う同じ顔。

「……おんなじ顔でおんなじリアクションしてんじゃないわよ」

「ああ、そうだ。売ってる途中でコイツがブツブツ言い出しやがったんだよ。同じ顔が嫌だとか、同じなのは顔だけで中身はまるっきり違うだとか」

「それは貴方がおっしゃったのでしょう？」

「いや、おまえが」

「いいえ貴方が」

「……いい、もういい、ストップ。聞くまでもない下らなさ、想像以上だったわ……」

どつと疲れが出たのか、こめかみを押さえつつリタルが制する。

「世界には自分と同じ顔した奴が二人いる、なんてよく言うけど……
……なんだってコイツラなんだろう……」

キョトンとした表情のグレープの前で立ち尽くしたトランも、疲れ切った顔で盛大に溜息を吐いた。

「そもそも、貴方は私よりも随分後に生まれたのですよ？ 年上は敬いなさい。それに、貴方は幸運にもこの私と同じ顔を持ったのですから、光栄に思いなさい。それから上級天使たる私の顔に泥を塗らない様努めていただきたい。貴方は素行が悪過ぎます。とにかく

そのボロ雑巾のような服はいい加減どうかしてくださいね。汚らわしい」

「爺は無駄に話が長くて扱いに困るぜ。つか、素行が悪いのは一緒じゃねえか……いや、でめえにだきや言われたくねえな。そもそも、でめえが俺様の顔を真似てんだろ？ てめえこそ光栄に思え！ 俺様を敬え！ 服の汚れが気にいらんないんならてめえがすすんで洗濯しろや。洗浄オタクの戯言にイチイチ付き合ってられっか」

「……ああもう、どうしても認めたくないようですね。己の愚かさを。実に嘆かわしい。何故このような愚者が私の顔をしているのでしょうか……」

「まったく、なんでンなたわけた潔癖天使が俺様の顔をしてるんだ……世も末だぜ……」

目の前で繰り広げられる現実から逃避するようになると背を向け歩き出すトランとリタル。

「……さて。帰るか」

「帰りましょうか」

「え？ ええ？ でもまだ、リチウムさん達が……」

『いいのよあんな馬鹿ども放っておけば。おなががすいたら帰ってくるデシヨ』

焦りの声を上げたグレープの視界を、ふいよふいよと半透明の金髪が遮る。

「あらクレープ。おそよう」

「もう大丈夫なのか？」

『大丈夫よトランちゃん……てか、心配してくれたの？ クレープ嬉しい！』

「だあから抱きつくなくなったの！ つか、なんで俺の時だけキャラが

「違うんだ！」

トランと聞けば目の色変えて飛び付くクレープと、そんな触れる事も出来ない幽体相手に、それでも押しつけようとジタバタもかくトラン。二人の……まるで子供のようじゃれ合いも日常茶飯事。キョトンとした顔のグレープの前で、やれやれと疲れた顔で溜息を吐くのは最年少のリタルだ。

「あんたたちまでアホやらかさないの……」

『アホとはナニヨ。アホとは。これは愛のスキンシップなんだから』
「なんだそりゃ!?!」

「……そんなの死ぬ程どーだっていいけど、……ねえクレープ。普段トランの頼み事しか耳に入れないあんたが、よくもリチウムの言う事素直に聞いたわね。しかも囿役だなんて。……いつもなら全力で拒んでるでしょうに」

『当然デシヨ。トランちゃんの一大危機なんだから。愛するトランちゃんの為ならこのクレープ。どんな苦行だって乗り越えてみせるわ!』

言ってる内に感極まったのが、クレープはトランの頭をぎゅっと抱きしめる。

「……だって。よかったわねえトラン。愛されて」

リタルの棒読みに、クレープをぶら下げたまま、トランはがっくりと肩を落とした。

「……帰るか」

「あの……リチウムさんは……」

くたびれた背に、おずおずと声をかけるグレープだったが、

「帰りましょう」

『ほらグレープ。立ってないデシヨ？ 入るわよ』

「……………はい」

(リチウムさん、ごめんなさい……………)

疲労に憑かれた連中の静かな剣幕に言葉を飲み込み、ただ懸命に、心の中で謝るより仕方なかった。

金色の輝き。

次いで、緑色の淡い光

洞穴にギャンギャン喚き合う二人を残して、騒動はようやく幕を閉じる

「……………で？」

かのように思われた。

「本題に入ろっぜ。ファーレン」

終幕

epilogue

「……本題、とは？」

洞穴には、リチウムとファーレン、二人の姿がある。

「『アナタガタの戦力分析』、ね？ ……まあ、確かにこつちの事もいろいろ掴んでるみてえだし、それもあるんだろうが。」

花禁術の密売ん時、押し問答になる前に出た話題についてはどうなったよ。

「……確か、最近魔族の動きが活発になってるとかなんとかぬかしてやがったっけか。」

今回てめえが重い腰上げて干渉してきたのは、そつちの調査も含めてのことだろ？

天使が魔族に接触する、なんてリスクでかい事、幾ら執念深いてめえでもただじゃやんねえだろ」

リチウムの浮かべたニヒルな笑みに、ファーレンは深い溜息をつくと、

「……本当に。余計な物事に関してだけ、働くんですね……その記憶力は」

気怠げに腕を組んで、近くの岩肌にもたれかかった。

「いいでしょう。貴方方にも関係していることですし。お話できるところまで話します。」

……時に、リチウム。貴方は神と呼ばれるものをご存じですか？」
「……………は？」

唐突な質問に、リチウムは瞳を丸くして素っ頓狂な声を上げた。

「……………神だ？」

「そうです。天使、人間、魔族。世界に住まう全ての種族の生みの親とされ、各種族に崇められている巨石の事です。我々が住む天界でも実際に巨石は祀られます。……人界には見当たりませんが、所在不明のそれを探そうとするストーンハンターが多数居る事はご存知ですよね？」

「そりゃ……………ご存知も何も、人界の巨石についての真偽不明の情報は五万と飛び交ってるが……………って、それと今回のとどうい関係があるんだ？」

「まあ話を聞きなさい。以前にもお話ししましたが、このところ魔族が人界に出没しているという報告が多数寄せられていまして。今回私に、魔族の実態を調査する様、極秘の指令が下ったのですよ。そこで、申し訳ないとは思いつつも」

「うそつけ」

「貴方方にご協力いただいたと、そういう訳です。警察内部の人間を操り『記憶を探る石』を使わせ、貴方方の記憶を魔族に見せると同時に、魔族の記憶も覗かせてもらいました。」

……………彼の記憶によれば、彼ら魔族の行動の活発化の要因は、魔族の巨石が目覚めた事によるものらしい」

ファーレンの表情はいつしか陰しくなり、金色の瞳は、虚空を通して何かを睨んでいる。

魔族に崇められている魔界の巨石が目覚めた

「……………それって」

告げられて、露骨に眉を顰めるリチウム。

「それって、具体的にはどういう事なんだ？」

ファーレンが、大きくずっこけた。

リチウムに限らず人界に住む多くの人間は、天界は愚か魔界の事情なんて知る由もない。神と崇められている巨石や魔族の存在さえ、神話の類だと信じて疑わない者がほとんどだ。

……大体、『石が目覚める』というのも解らない。

世界を創造した巨石が確かに在るといふ事を前提としても、だ。

巨石は意思を持っているという事なのか。

しかし、それが目覚めたからってどうなる。

魔族がはた迷惑にお祭り騒ぎでも起こしているのだろうか。

リチウムの思考を、降ってきたファーレンの声が中断させる。

「……その蜘蛛の記憶によれば、魔族の巨石の力を持つてすれば、
魔石にもう一度生命を与える事が出来るのだとか」

聞こえてきたファーレンの言葉は、全く現実味を帯びないものだった。

「……マジか」

「冗談でこんな事言いませんよ。このところの魔族の動きは全て、
魔石収集の枠を出ない。貴方の禁術封石だっつてこうして例外なく、
魔族に狙われたでしょう？ 貴方は『死球』と呼んでいましたか？
…その黒い結晶はかなり高位の魔族だったようですね」

言われてリチウムは、先程消滅した魔族を思い出す。リタルの言う通り口数の多い魔族だった。しかしその発言は全く意味不明な内

容だったのだ、ほとんど聞き流していたのだが……奴は確かに、『死球』を『主』と呼んでいた。

ファーレンの話に当てはめると、あの魔族は『死球』を『死球』という能力を持っていた魔族を蘇らせようとしていた、という事になる。

「つか、禁術に指定されてる魔力の持ち主が、どこどこ生き返ったりしたら、とことんヤバ気な……」

リチウムの呟きに、ファーレンが呆れ顔でそちらを見遣る。

「ヤバいどころの騒ぎではありません。魔族が蘇らせようとしているのは、かつての大戦で石と化した魔族の王たちです。先の戦いで我々だって例外なく、大いなる魔力を所持した多くの仲間を消滅させられた。現時点で我々と彼等の戦力は五分五分なのです。」

今、かつての魔族王達が目覚めればそれは、魔界が天界の戦力を完全に上回るという事。これまで辛うじて保たれていた均衡は崩れ、魔族が世界の支配を目論み動きだす日もそう遠くはない」

静かな剣幕に、さすがのリチウムも返す言葉が無い。

「……………」

沈黙を横目に、壁につけていた背を離すファーレン。
畳んでいた羽を悠然と広げる。

「私はこれから、お上に調査結果を……事の次第を報告する為に天界へ向かいます。今後は恐らく、これまで以上に我々の魔石探索が活発化すると思います。現段階ではまだ魔族も水面下で動くのみに徹しているようですが……我々の動きに気づき、我々が事態を把握

している事を悟れば　次に魔族がどんな手に出るか。さすがの貴方にも予想がつかますよね？」

「面倒なのが目に見えて、考えたくもねえけどな」

吐き捨てるように呟くりチウム。

構わず、ファーレンは二対を軽ろやかに羽ばたかせ、僅かに宙に浮いた。

生まれた風が、リチウムの長い銀髪を揺らす。

「そういう訳で、貴方にはなんとしてでも、『死球』を死守してもらいたい。天界で保管したいところですが、その石はあまりにも禍々しすぎて正直手に負えない。貴方方に手を出さない理由は……確かに面白味があるから、というのもありますが、大きく占めているのは、その『死球』の存在です。あの蜘蛛も言っていました、我々も……何故貴方がそれを使いこなす事が出来るのか、理解できない」

ファーレンの物言いに、思わず左手の黒い石を見る。

「……つか、んなにすごいもんなのか。コレ。確かにグレイプに触らせたら軽く世界が滅んじまいそうなもんだが」

「冗談でもよしてください」

リチウムの軽口に、しかしファーレンの顔は一瞬にして青ざめ、

「無知とは時にあらゆる災厄を上回る恐怖を齎すものなのですね…」

…」

やれやれと額に手を当て、嘆きの表情で首を振る。

動きを止めるや否や真顔になると、ファーレンは改めてリチウム

を見下ろした。

「……ああ。それと。理解していないようですから一つ物申しておきますが。トランの場合は心配いりません。『炎帝』は天石ですから」

リチウムの目が点になる。

「……って、天石？ あのレア物の？」

「ええ。一つの取り残しもなく天界に保管されていると言われる天石を、一体どういう経緯……ルートで彼が入手したのかは結局把握できませんでしたが。今日彼の記憶を覗かせてもらったところ、確かにあれは天石。炎を統べる天使の結晶でした。炎の魔力において、あの方に敵うモノなどいません」

「……確かにあの石コロの魔力量は半端ねえが……マジもんの天石ってか……」

これまでリチウム達は、手に入れた石の属性や魔力量を調べ、気に入ったものは石化製品に造りかえ、気に入らないものは総てフアレンに売っぱらっていた。リチウムたちにとって石は、便利な道具か資金源か、そのどちらかできなく、その素性を調べた事は一度たりともない。これは一度、今所持している全ての石を、文献かなにかでじっくり調べた方がよいのではないだろうか……。そこまですべてからリチウムは、これまで自分たちが最も多用してきた石を思い出す。

「……リタルのは」

「彼女の魔石も特殊ですしね。用心は必要かもしれませんが。『転位』の能力は、現存している魔族の中でも持つ者は少ないらしいですから」

……それは、蜘蛛の魔族が口にしていた事だった。想像していたよりも事態は大事で、頭が廻らなくなっている。自覚している以上の自身の余裕の無さにリチウムは舌打ちした。

フアーレンの言葉が止んで、しばしの沈黙が流れた。

口を開かないところからして、自分に言うべき事はもうないのだらう。

こちらにももう、聞いておく事はない。

「……まあ、一応努力はする」

告げて背を向け、出口へ向かって歩き出す。

と、風の吹く方から、大きな溜息と、よく通る例の音がする。

「……これ以上ないと言える程の大事を前にして、相変わらず飄々とした物言いですね。貴方らしいといえば貴方らしいですが。……そのうち、そうも言っていられなくなりますよ」

宙で腕組みし呆れ顔で見下ろしていた天使は、次の瞬間、その金の瞳でリチウムの姿を直視した。

「貴方方は」

「お帰りなさいです。リチウムさん」

扉を開けるとすぐに、自分を出迎える声が聞こえて、リチウムは思わず目を見開いた。

朝靄が立ち込める街並み。昼間の喧騒が嘘のような世界。東の空が徐々に明るみ、今にも太陽が顔を出しそうな気配が立ち込めている。

総ての人間が例外なく爆睡こいていると確信していたリチウムは、ようやく辿り着いたホームから飛び出してきた笑顔に、いささか拍子抜けした。

「起きてたのかよ」

「は、はい。……えと」

何か言いた気なグレープの様子を横目にリビングに入ったリチウムは、再び目を丸くする。

リタル。

トラン。

クレープ。

三人がそれぞれの位置で雑魚寝していた。

「みなさん、帰ってきてすぐに、動かなくなってしまうって」

リチウムの様子に苦笑してみせるグレープ。

三人は……きつとグレープが掛けたのだから毛布に包まって、なんと幸せそうな寝顔で床に転がっていた。

ちなみに、幽体であるクレープにも毛布は掛けられていたのだが、透けた体と毛布が重なっていて全く意味を成していない。

「……どうせならソファで寝ればいいのによ……ったく」

踏んでも謝らねえぞ……などと悪態ついたリチウムの横でグレープはクスリと笑み、

「きつとそれだけお疲れだったのですよ」

言つて、三人を見回した。

「まあ、リタルに至つちや三日も毒漬けにされてた訳だから……」

リチウムは身を屈めると、横のソファに寄りかかつて寝ているリタルの顔を覗き込んだ。

顔にかかる黄緑色の髪をかき上げる。洞穴の暗がりで解らなかつたが、こうして改めて窺えば、その顔色から見て取れた。リタルの消耗はかなり激しい。

昔から彼女は、年齢を疑わずにはいられぬ程の気丈さを持つていた。おそらく今回も、無理を押しつけて場に立ち続けていたのだろう。

『魔眼』さえ満足に使えぬ状態にあつたのに、初めて対峙した魔族相手に強気に振る舞い、トドメに全員を連れて『転位』したのだ。無事この部屋に着いた いや、自分が洞穴に辿り着くまで意識を保つていただけで上等、と賞賛すべきであろう。

……まあ、クレープの奴がいつもの調子で怒らせて、負けず嫌いなこいつの調子を保たせていたからこそ……というのも、あるんだろうが。

立ち上がつて、周りを見てみる。

トランやクレープも、熟睡……というよりは、ぐったりしていた。普段は眠りの浅い彼女達が、全く起きる気配がない。

この分だと彼等はこのまま 数日は眠り続ける事になるかもしれない。

「リチウムさんはどうなさいますか？ お風呂にしますか？」

思考を止めて視線を戻せば、窺うように自分を見上げているグレ

ープの赤い瞳がすぐ側にあった。

「あ？ ああ……そうだな」

言われて自身を顧みれば、体が疲労で悲鳴を上げている事によつやく気づく。

「風呂は後にして、俺様も寝るわ」

言つて背を向けると、自室へ向かうリチウム。その後ろから鈴の音がかかる。

「そう、ですね。そうした方がいいです。なんだかリチウムさん、とても疲れた顔をなさってますから」

「……………」

……ポーカーフェイスには自信があったのだが。

普段ポケーっと思ってるかと思えば、こういうところは結構鋭い。振り返つて、とたとと奥へ歩いてゆくグレープの、どこか危なっかしい足取りを目で追いながら、リチウムは先程からいまいち廻らない頭のまま、その名を呼んだ。

「グレープ」

「？ はい？」

立ち止まって、グレープは小声で振り返る。

さらりと揺れる、艶やかな青の髪。対照的な輝きのルビーに真っ直ぐに見られて、リチウムは一瞬完全に言葉を見失ってしまった。

そんな自分を不思議そうに見つめながら、しかしグレープは静かに、次の言葉を待っていてくれる。

彼女の浮かべる穏やかな表情は、日常の象徴のようなものと、この時リチウムは改めて思った。

彼女の姿が異様に、儂げに映ったからだ。

出会ってから、三ヶ月は経過しただろうか。

しかし三ヶ月どころか。もうずっと前から自分と一緒に居たような……そんな錯覚を抱かせる程に、彼女は生活に溶け込んでしまっていた。

自分が今ここで、先程まで考えていた事を口にしてしまえば、たったそれだけで彼女に象徴される平穩が崩れてしまいそうな、そんな訳のわからない漠然とした感情を抱く。

……これを、不安と呼ぶのだろうか。

しばしの沈黙の後。

「……これから。忙しくなる」

たったそれだけを、リチウムはようやく口にしたり、事を知らせるには全く役不足な羅列。

短い言葉は、彼女には到底理解不能だっただろう。

証拠に、グレープは大きな目を丸くしたまま、しばらく自分を見上げていた。

が、

「はい」

次の瞬間には、いつもの笑顔が零れる。

頷いた彼女は、何事もなかったかのように、再び、とたとたと歩き始めた。

太陽が上がる。

いつもの日常。

いつもの朝の光景……………とは、ちよつと違つた、穏やかな朝ぼらけ。

自室に戻つて、ベットに倒れこむ。

「……………」

リビングからは相変わらず、パタパタと何かが動く音がする。

それを遠くで聞きながら 先程抱いた妙な不安と、帰宅の際ずつと心中を覆つていた厚雲が不思議と消え去り……………軽くなつている事を感じて、リチウムは襲つてきた睡魔に素直に身を委ねた。

昇りゆく朝日の白い光は、少しだけ、自分と同じ顔をした慇懃無礼な天使を思い起こさせた。……………が、どこまでも直線で、刺さつたら痛そうなそれとは明らかに異なる穏やかな光が、カーテンの僅かな隙間から、薄暗い室内に差し込む。

白銀の光帯。

ゆつたりと、流れる時間。

ふと、洞穴内で最後に聞いた、奴の予言めいた言葉が脳裏に蘇る。

貴方は、決して事態を避ける事は出来ないでしょうから。

「……………つか。迷惑料。ふんだくるの忘れた。……………俺様とした事が」

「終」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0700n/>

白銀の夜明け（プレリュード）[乾クエ1]

2010年11月17日10時03分発行